
俺様な神様と普通の俺の異世界旅行記 in ネギま?

Neight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺様な神様と普通な俺の異世界旅行記 in ネギま？

【Nコード】

N1684V

【作者名】

Neight

【あらすじ】

俺こと、水無月^{みなづき} 光一^{こういち}は車に轢かれそうになっていた子猫を庇い、代わりに轢かれてしまった。

気付くと親友に似ている自称神様（笑）の3人組が現れ、ある条件を守るならネギま！の世界へ転生させてくれると言われる。

我俣で泣き虫で単純で俺様な神様と原作知識とチートな能力を貰っただけの（というより無理矢理神に変換させられた）普通な（筈の）俺がネギま！の世界でゴロゴロすr…え？させてくれないだ！？

この小説は主人公最強、原作ブレイク、原作キャラの崩壊、TS

等を含みます。

又、この小説に出てくるオリキャラは多くが別小説に出てくるキャラです。

ですが、そちらを読まなくても全然大丈夫かと思われます。

更新不定期です。亀更新です。ご注意ください。

1. プロローグ。(前書き)

はじめまして、Neigantです。

2次は初めてなので上手く書ける自信が無い… I I I o r z (ナラ
書クナヨ

下手ですが、どうか生暖かい眼差しで読んでやって下さい。
それではどうぞ^^……

1. プロローグ。

俺は水無月 光一。

成績普通、運動神経普通、身長普通、体形普通、顔普通…

普通を具現化したらこうなる！というごく普通の高校1年生だ。

ん？ 何故そんな事を言うかって…？

隣の家が異常なんだよ！！

そのご近所さん家は超が付くほど馬鹿でかい日本家屋、家族全員恐ろしいほどの美形…。

更に驚くべき事は俺の同級の2人だ。

奴ん家の家族構成は父、母、双子の兄弟、妹なのだが…

運動神経は良いわ、料理上手いわ、頭良いわで世界相手に何もかもがトップクラス。

全員揃うと世界が敵に回っても勝てそうなびつくり 人間大集合！
な家族なんだよ！！

…っつていかんいかん。

赤信号の交差点渡りそうになった。 あぶねー

みゅーみゅー

…ん？

なっ…道路の真ん中に子猫がいる…！？

っ…！ 車が…！ 引かれる…！！

そう思った時、既に俺は駆け出していた。

子猫を掴むと歩道にいたおばさんに向かって投げる。

おばさんは、驚いていたけれど、無事子猫をキャッチしてくれた様だ。

もう、直ぐ傍まで車が接近している。

俺はもう助からないだろうな…そう思った次の瞬間、視界が衝撃と共にブラックアウトした。

「…美味しいな」

「いつも思っけどどどっやって淹れてるんだい？」

「ありがとうございます、お兄様。」

ブレンドする茶葉によって、蒸らす時間、お湯の温度を知り、己の感を働かせれば簡単に淹れる事ができますよ」

闇色の髪と瞳の青年が淹れられた紅茶を飲み、ボソツと嘆息した。

その隣に座っている白銀の髪と眼の青年が問いかける。

その反応を見て、金色の髪と瞳の少女と言っても過言ではない女性
が、ふわりと微笑む。

白銀の青年は返答を聞いて、「いや、それ、普通無理だから」と苦笑した。

「あの話は変わりますが…お兄様方、気持ち悪くなりませんか？」

「うっ…まあね？」

「…先程よりはマシだが」

3人は顔を見合わせ、顰めた。

それもそのはず、この空間が“異様”なのだ。

空は白、正面には黒い城、地面に咲いている花の色は金色の濃淡で出来ているのだから。

「まあ、確かに、黒い空、金の城、白の花よりはね…」

「これはこれで“精神と の部屋”みたいですが」

「創る物に属性色が出る事にこれ程まで後悔する日が来るとはな…」

3人は同時にため息を吐いた。

「あれ、そういえば、父さんは大丈夫なのかな？」

とりあえず、周りの事を考えないように話を換えようとし白銀の青年は別の話題に換えようとする。

「…あら？ “あちら” に気配がありません」

「“こちら” にもないねえ…」

「…なら “そちら” ではないのか？」

「…あ、見つけたは見つけたのですが…」

「ですが？」

「如何した？」

金色の女性の滅多に見せない戸惑いに2人は軽く驚くが、続きを促す。

金色の女性は暫く眼をさ迷わせていたが、内容を把握できたのか、口を開いた。

「如何やら、“あのバカ”に“あちら”から追放され、お兄様の言うとおり“そちら”に適当に飛ばされた様です。

飛ばされ先ですが、この前お兄様方が半分おふざけで創った“あの世界です”

「…マジ？」

「マジです」

それを聞いた2人は眉間に皺を寄せ、考え込みだした。

何せ、仕事の片手間に適当に創った“あちら”である。

何が起るかわからない。それに…

「父さん、泣かされてないよね…？」

「いや、あの“あちら”だ。

綻びはあるにしても一応原作通りに創ったから…もしそのままなら確実に泣かされるだろうな」

「助けに行こうにも、私達はある意味死んで肉体が修復されてませんから、この空間から出る事はおるか、連絡すら取れませんよ」

「だよねえ…僕たち自体、いつ消えてもおかしくないし」

「…あ」

「ん？ 如何したの兄さん」

「今、ある世界の…未来の俺達と関係のある少年が猫を庇って車に引かれ、死んだんだが」

「だが？」

「魂が強いから、此処につれてこれそうだ」

「…ふーん、なるほど。…その子に任せてみる？」

「それがよさそうですね」

3人は顔を見合わせ、悪戯を企んでいる子供の様にニヤリと笑った…。

2・転生しました。(前書き)

編集したら話が半分消えていたのに気がつかなかった…。

本当に申し訳ありません… I l l o r z

2・転生しました。

《side:光》

ん…知らない天井だ…。

なんとなくテンプレを言ってみる。

起き上がって辺りを見回すと、白い空、黒い城、金色の花…総てがその3色の濃淡で出来ている世界だった。

ナニコレ“精神と の部屋”モドキ？

というか、俺死んだよな？ つて事は此処は天国…いや、地獄か？

「あー残念ながらそのどっちでも無いよ〜」

うおあ！？ 誰だっ！

つてお前は…！！

振り返ると、そこには先程俺が愚痴っていたあの“憎たらしいほど優秀な3兄妹”がいた。

…いや、正確には違うな。

アイツ等と色が違うっ…！！

ハーフらしいが髪色は弟が茶色で一人は黒だし、眼の色は紫だった
しなあ。

それにアイツ等より年上そうだし、髪型違うし、雰囲気違うし、黒
s r y

「…何か言ったかな？」

「イエ、何デモアリマセン」

「…まあいいや」

うおお………命の危険を感じたぞ……怖い怖い。

というか、コイツ等がアイツ等じゃなかったら何なんだ？

「いや、俺達はお前の知ってる奴と同じであって違う。 ……俺達は
君達の言う所の神と呼ばれる存在だ」

はあ！？ 意味判らんし！？

いきなり神とか言われても…ねえ？

というか、友達と同じ顔をしているとか…。

あ、もしかして、俺の妄想が生み出した“自称神（笑）”なのか！？
って…心読めんの？

「自称神（笑）”…。別に君の妄想云々の前から僕達は存在してるんだけどなあ…。

思考とかはそりゃあ読めるよ？ って、そんな事は如何でも良く
てね…君、転生に興味ある？」

え…転生？ そんな事出来んの??

「はい。まあ、転生先は強制的に“ネギま！”の世界になってしまうのですけどね」

え…死亡フラグ満載じゃん！！ 俺に死ねと？

「条件守ってくれるならチートにしてあげるよ?」

…え、マジ？

ところで、条件って何なんだ？

「ある人…俺達の“父上”の傍にいてもらいたい」

「一度会えばその条件クリア出来るから安心して下さい」

…うお！？

案外簡単そうじゃね！？

で、チートは何貰えんの？

「アレで良いよね？」

「そうですね。最近人手が足りなくなってきましたし」

「そうだな。俺達にとっても彼にとっても有益になるだろう」

…あのー。

遠くに離れて何ごそごそしてらっしゃるのかな自称神（笑）様達。

「あ、ごめんねー？ 君の能力決まったから用意したんだー」

決まったんだ。

で、何？ “ネギま！”だから最低限死なない程度の力はほしい所

なんだけど…。

「そこは安心して頂いて結構です。 寧ろ“おーばーきる(笑)”
ですので」

…別に無双は要らないんだけど。

ま、いつか。 それで？

「君には神に成って貰うよー」

……。

………What??

今サラリととんでも発言がきこえた気がするんだけど…気の所為だ
よねー。

「いや、本当なんだけれど…因みに神になるか一般人で逝くかしか
ないからね?」

拒否権無くな!?

人権は!?! 俺の人権は!?!

「ない」

「ないよ」

「ないです」

不幸だー！ー！ー！！

「まあ、そんな訳だから頑張って第二の人生楽しんできちゃいなよ」

…いや、人生じゃない気がするんだか！？

それに何だか嫌な予感が…

「…“父さん”は、君の知ってる人物とかけ離れてるから注意だよ。

転送先は“父さん”の近くにしておくから安心してね？

後、転送したら自動的に神に魔改？…ゴホン、変換されてるはずだよ」

…何か今、変な事口走らなかつたか？

って、その右手に持つ“押すな危険！”って書かれているリモコン何なんだ！？

…一斉にそっぽ向くなあっ!?

「じゃあ、準備は良いかな？」

良いかなって…俺は何にも要らなくね？

って、そのリモコン何で持ち上げるの…？

「…じゃあ、いってらっしゃいー」ポチッ

ちよっと待て、嫌な予感がつてうわあああああああ!?!?

突然足元に開いた穴に落ち、浮遊感に襲われた。

この先、無茶苦茶後悔するなんて、この時の俺は想像もつかなかった…。

暫く暗闇の中を落下した後、突然視界が開けた…というか明るくな
った。

…ん、ついたのか？

でも浮遊感は無くなってないしな…。

先程までは感じなかった打ち付けるぐらい強力な風を身体に感じながら目を開ける。

そこには雲があった。

…え、これ、俺に死ねと？

「意味分かんねえええー！！！！」

何で転送先が空なんだー！！

グロテスクな死体になれと？

転生？（笑）早々死にたくない！！…という事でパニックっている頭を無理矢理使う。

…そういうえば、俺って神に変換されたんだよな？

じゃ、何でも出来るんじゃない？？

という事で背中に翼を想像した。

すると…？

「…生えた」

天使の翼みたいな真っ白いのが一對。

……。

まあ、助かるからいいか。

あんまり深く考えない様にしよう。

徐々に落下速度を下げながら危なげなくふわりと着地すると、背中の翼は光の粒子になって消えた。

「で、此処は何処だよ？」

必死になってたから気がつかなかったけど、辺りを見回すと木がいっぱい…。

はい、森ですね。　ありがとうございます。

「…とりあえず、問題の“彼”を探してみよう…」

何処か住める所もしくやいけないし…という事で森の中を散策する事にした。

3時間後

……。

済むのに最適そうな所無し。

別に雨は降りそうに無いから洞窟とかじゃなくて良いけど、せめて狼とかから身を防げる様な場所無いかな……。

それに例の人物居ないし……あいつ、座標間違えたのか!?

まあ、人は見かけたが……幼児が釣りをしていたぐらいか……。

……。

……まさかね。

流石にそんな訳……

「お前、何処行くんだ?」

「ちよ!?!?」

突然背中をガシツと捕まれ、物凄い勢いで引きずられた。

振り返ろうにも地面が悪い所為で揺れて振り向けない。

暫く引きずられていたが、突然放された。

思いつ切り尻餅をついた…痛い…（泣）。

「いきなり何する…」

と言いかけ、啞然とした。

目の前には俺を拉致った犯人…うざいぐらい美形の幼児は屈託の無い笑顔を俺に向けていて。

「これ、食つか？」

クイツと差し出された魚の串焼きを見て俺は固まった。

3・幼女になりました。(前書き)

ごめんなさい；

更新する予定だったのに、削除してしまったので遅れました<>…；

因みに、俺様なゼウス君の過去話は多分本編では明かされない予定ですw w

3・幼女になりました。

《side:光》

目の前では美形…というより美幼児(?)が俺に向かって魚の串焼きを突き出していた。

俺はそれを…無言で受け取る。

こんな幼児相手に警戒する方が無理だし、腹減ってたんだもん!!

…どうせ現金な奴だよ俺はっ!

ってか、こいつ誰だっ!

「あ? 俺様か? …神だ」

「…っは? マジで?」

「当たり前だ。何処にそんな下らない事で嘘をつく奴がいる?」

います。世の中には死ぬほど嘘をつく奴ぐらい一杯いますから!!

俺も数え切れんぐらいいついてるしなっ!

「お前、嘘つきなのか？ 悪い奴だなー」

…え？ 普通じゃね？

嘘ついた事が無い奴なんて多分いなくね？

「生憎、俺様は最近初めて“あの場所”から出たばかりでな？」

「ふーん。 そうなのか」

俺がそう返すと、心底驚いた様な顔をした。

…俺何か変な事言ったか？

「お前、反応薄いな…聞き返さないのか？」

「じゃ、聞かれないのか？」

「…いや。 すまん」

「別に良いって。 誰しも言いたくない事ぐらいあるぞ」

何故か上機嫌になって鼻歌歌い出した。

…変な奴。

というか、こいつ…改めて見ると凄い見た目だな？

白に近い銀髪に金眼。

顔つきは中性的で、一瞬女の子かと思った。

服装は何故かフリルがついたYシャツに短パン、ブーツ、マントなのかローブなのか良くわからない独特な物を羽織り…王冠(?)を被っている。

…アレなのか!? 気分はコードブ イカーのエン ラーなのか?

…同じ週刊雑誌なだけに。

「この格好はノリだ。 後、顔は素だ」

「さいですか」

マジかよ…

やっぱ、美形は男の…いや、俺の敵だな!!

別に悔しくなんかないぞ?

…泣いてなんか無いから…?

「…お前、美形は敵って言うっているが、自分の顔を見てから言え。後、お前男じゃないから」

呆れ顔でそう言いながら、何処からか鏡を取り出し、差し出してきた。

ほら、俺は極普通の日本人…だ？

「…は？」

そこには俺じゃない俺がいた。

日の光によって金色にも銀色にも見える不思議な艶やかな長い髪。

髪と同色の長い睫毛に縁取られた、大きく開かれた透き通った海のような水色の瞳。

桜色の唇に、柔らかそうな頬。

正真正銘の美少女がいた。

…いや、ちょっと待て。

何故俺、今まで髪の毛長いのに気がつかなかった？

それに、さっき「男じゃない」って…。

マジ…？

「マジ、だ」

目の前の幼児は哀れみと同情の眼差しを送ってきた。

…やべえ、恋愛が難しくなった。

精神的な薔薇^{B L}か、外見的な百合^{G L}か…。

やべえ…マジで死活問題だ…。

頭痛い。

「…そこ気にするのか」

何か聞こえたが、俺にとつちゃあ無茶苦茶重要だ！

性別だぞ！？

精神的に死ねる…。

俺が凹んでると「まあ、頑張れ」と言われた…くそ。

冷めた魚をやけ食いで平らげ、取り合えずその事は保留にしとく事にした。

…考えるだけ無駄だろうし。

とにかく、あの3兄妹モドキの言っていた奴であっているのか聞いた所、「それ、俺様の事だ！」と言った事から、コイツが“父さん”らしい。

…無理がありすぎじゃね!?

一応神の中の神らしい。

大丈夫か神様社会!?! …やべえ、鬱になってきた…。

で、何で此処にいるのか聞いたら、“天界でとある事件が発生して、それに巻き込まれ、神力つてのを9割封印されて無理矢理追い出された”らしい。

…無茶苦茶だな。

どんな事件なんだと聞いたら、「それよりも現状の事を考える方が大事だ」と言われた。

ごもつとも…。

話をそらされた気がするが、まあ、寿命は死ぬほどあるし、そのうち嫌でも聞けるだろう。

…まあ、取り合えず閑話休題。

…って、そういえば名前聞いてねえ！

「あのさあ…」

「うん？ 俺様はゼウスだ」

言おうとした瞬間言われた。

心を読めるのは知ってるが、何かむつときた。

…ま、いいや。

「俺は光一だ」

「見た目に合わないな…」

「確かに…名前変えるか。でもな…親に貰った名前だしあんまり
弄りたくないな」

俺の親、変わってたけど普通に良い親だったしな…。

今頃、どうしてるんだろう…。

「…では、光はどうだ？」

「あ、そうするか」

俺がやや沈んでると、ゼウスが提案した。

それなら良いかもしれないと、俺は即、返事した。

こうして俺こと“光”は長い異世界旅行が始まった。

…あ、一人称変えた方がいいのか？

4・魔獣が仲間になりました？（前書き）

読んで下さり、ありがとうございます！

今回は短いです…すみません…。

見直しはしていますが、また誤字・脱字があるかもしれません。

4・魔獣が仲間になりました？

《side：光一改めレイ》

前回、異様に疲れた俺だ。

一人称、迷った挙げ句…人前のみ変更する事にした。

つまり、心の中やゼウスと居る時は今まで通り俺、それ以外は私にする。

…間違えそうだな…。

「そついえば、今更だけど敬語とか様付けの方が良い？」

「いや、メンドクサイからそのままが良い」

良いのかよっ!？

初っぱなからタメだった俺も俺だけど!!

ま、いつか。

俺達はその後、互いの事を軽く説明しながら寝た。

「では、此処は俺様の息子達がふざけて創った“ネギま!”の世界か」

「そうらしい。…創った張本人が言ってたし」

朝、起床すると、たき火に水を掛け、簡易片付けをすると移動を開始した。

流石に森の中に長居をしたくない。

不便過ぎる…!!

獣道らしき道を進んでいくと…。

グルルルッ
ツツ……

くさむらから やせいの まじゅつが とびだしてきた! (ポ
ン風)

「うおおっ!?!」

「お、ワンコだな。可愛いな……」

いや、ゼウスさん、なに呑気な事言ってるんですか!?

“可愛い”なんていうサイズじゃないからなっ!!

目の前にいる黒い狼っぽい魔獣は…前足から頭までの高さだけで少なくとも俺達の身長はあるぞ!?

頭胴長に至っては…

ガルルルッ…

「…何だお前、お腹空いてるのか？しょうがない、俺様のコレクシオンを分けてやろう!」

無茶苦茶威嚇してません!?

…というか、何処からペロキャン持ってきた!?

ってというか、魔獣の数が増えるからそんな場合じゃないからなっ!?

一番初めに会った奴の後ろに、俺達から見て扇状に広がっている。

状況から見るにこの矢鱈デカイ奴がボスらしい。

ゼウスがペロキャンを差出すと魔獣達は唸り声を上げながら睨みつけた。

「ゼウスっ！ 早く逃げよう…って何近づいてんだよ!？」

暫くお互いにその場で止まっていたのに、ゼウスの奴が一步を踏み出しやがった…！

ちょ!?!? 喰われるから!??

「レイ、こういうのはな…誠心誠意、話しかければ分かってくれるもんだ。

…おい、ワンコ達、俺様と友達にならんか？」

ゼウスがニコニコしながら魔獣にペロキヤンを持った手を伸ばす。

そんな彼の後ろにさりげなく隠れながら俺は固唾を呑んで見守る。

…何故かゼウスの背中が大きく見えた…気がした。

「ほら、こっちに来るが良い」

……。

「何だお前、照れてるのか? …可愛い奴め」

…ガブツ!!

「…ぎゃああああ!!?」

ガアアアアアア!!!!!!

「死ぬうううう!?!」

……… 本当に、気がしただけだった。

あれから何日間か戦闘したり逃げたり逃げたり逃げたりしていつの間にかワンコの群れのボスが仲間になっていた。

…何故??

いつ、どのタイミングでなったのか全く判らない。

…まあ、モフモフだからいつか。

そりゃあ、敵意剥きだしだったら逃げるが、モフモフだぞ?

敵意ゼロでモフモフなら猫だろうが虎だろうがライオンだろうが魔獣だろうが変わりは無い!!

「…気持ち良いな、毛並み」

…意外な事に漆黒の毛並みは艶やかで気持ち良い。

それにしても…こいつにも名前が必要だな。

こいつじゃ呼びにくいし。

「ゼウス、名前如何する？」

ロボは在り来りだしな…。

「むう…黒豆…「ガブツ…グキツ」じ、冗談だっ！
冗談だから放せっ！！腕が死ぬっ！？」

何かが折れるような音と悲鳴が聞こえてくる。

…豆っていうサイズじゃないだろっ！？

というか、ゼウスって…本当に最高神なのか…？

……………鬱だ…。

「…まあ、クロでいつか。そのまんまだけど」

こうして、俺はこのワシコの事をクロ（仮）って呼ぶ事にした。

…って、あれ？

クロの率いてた群れは如何なっただんだ？

5・修行の成果。(前書き)

申し訳ありません<>；

一気に300年経ちます。

因みにこの話で1500年代となりますので、彼らが来たのは1200年代となります。

原作頃には(一応)主人公のレイちゃん約800歳です。

…パないw

というか、レイちゃん強くし過ぎたかな…。

いや、これくらいまだまだですよね？

戦争ぐらいには更に強くなる筈…？

レイアウト変えてみました。

もし、見難かったら教えてください、変更します^^；

次話は…テンプレ的展開にはしります。

誤字(?)修正しました。(7/31 13:15頃)

…恥ずかしい。

5・修行の成果。

《side:レイ》

…あれから、300年余りの時が過ぎた。

え？

略し過ぎ???

…作者の力量が残念なのと話数の都合上省くらしい。

というか、書くとしても修業風景だけだからな？

…それとゼウスに振り回されて魔法使いに「修行の成果を試してみろ」的な理由で喧嘩売ったり喧嘩売ったり喧嘩売ったりたまに道中で子供に修行つけたりしたけどな!?

…お前も十分子供だって?…ツッコんじゃいけないんだ、そこは。

俺の意思や制止を聞かずに攻撃してその後全て俺に任せるもんだからゼウスだけならまだしも俺まで賞金首になっちまったんだが!?

因みに、今の所人殺しはしてないが如何せん喧嘩売った人数が人数なので500万ドルずつ賞金がかかっている。

隠れて逃げようにも、ゼウスが認識阻害をしてくれる訳も無く、狙ってくる奴は後を絶たない。

…はあ、何でこんな事になっちまったんだろう…鬱だ…」

「…レイ、何故溜息吐きながら木に頭をぶつけているんだ？」

後半脳内ただ漏れだぞ？」

「え…何処から？」

「狙ってくる奴は…あたりからだ」

げっ…危ねえ！！

ゼウスに対する愚痴を聞かれると嬉々として更に暴走するから困る…！

いかん、ストレスで十円ハゲ出来たかも。

…つとまあ、そんな事はどうでも良いな。

因みに修行の成果は…

【魔法の射手^{サキタ・マギカ}】が多種属性無詠唱タメ無しで各1000矢まで行ける事になったのと、一応自分の知ってる限りの魔法全て無詠唱で出来るようになった。

あれだ、無理矢理神に変換させられた所為で呪文覚えるのは速いわ、属性関係なく色々使えるわで…最早人間じゃない。

…あ、神は人間じゃないか。

今は【魔法の射手】^{サギタ・マギカ}の一矢一矢の威力上げる為に魔力効率を上げるのと魔力量を増やす事を目標にしている。

それを上げれば取りあえずマイナス面は無いだろうし。

今の威力は【雷の斧】^{ディオステュコス}よりやや弱いぐらい。

…【魔法の射手】^{サギタ・マギカ}が魔力効率、使い勝手の良さとか見て1番最強だったりして。

因みに発動キーは【デイル・ディア・ディレスト・ブローディア】になった。

何故こんな発動キーなのかと言うと、ゼウスが「俺様がレイのを考えるからレイは俺様のを考えるのはどうだ？」と言ってきたからだ。

…例として、エヴァの発動キーを上げたらリズムもそうだが、花を使っている所まで真似したらしい。

というか神なのに花の名前は勿論、花言葉知ってるのか…？ これ。

明らかに知っててこの花を選んでそうで怖い…。

俺はそれに対抗して同じく花で【ロス・チャイルディアーナ・グロリオーサ】にしてみた。

発音はハリー ッターの物を浮かせる一巻に出てきたあの呪文な？

花の名前と学名をミックスしただけ。

花言葉はもろ嫌味だったのだけど、普通に喜ばれた…。

くそ…何故か負けた気がするッ！！

…まあ、ともかくネギま！の魔法はそんな所。

気の方はラカンとまでは行かないが、【気合い防御！モドキ】は出来るようになった。

【咸卦法】も時間はかかるが出来る。

習得するのに半年かった。

まだまだ改善しないといけないけどな？

後、ドラゴンボールのまね事が出来る。

あれは楽しい。

ハゲフラッシュ！（笑）とか出来るし！！

いや、俺…ハゲてないからな？

…うん、一通り反復復習とかしながら余った時間にオリジナル創ってみるのも楽しいかもしれない。

でも、大概神力使えば出来ちまうんだよな、これが。

亜空間倉庫モドキとか、ダイオラマ魔法球モドキ…というより更に高性能な物とか想像するだけで創造出来るとか…「何じゃそりゃ!？」って感じた。

初めての時は制御が難しかったが、慣れればこっちの物。

何せ、「神力を制御」するだけで殆ど可能になっちまうんだから、魔法の修行するよりはるかに効率が良い。

それを魔法を死に物狂いで覚えた後だったから一時期引きこもりうかと真剣に考えた。

一応一年以上離れ無ければ良いと言われてたし…と思って、ゼウスとク口宛に「暫く放置してください。人生に疲れました」と置き手紙をして一人旅したら翌日隣に一人と一匹がいる始末。

…無理な理由が判った。

離れても向こうから追い掛けて来るんだから…。

しかも俺よりはるかに強いし速い。

どの辺が一割(実際は手加減しているから更に低い)なのか聞いた。い。

…どうやったたら極限に手加減した(本人曰く0.01%)【魔法の射手】一矢で直径2kmのクレーター作れるんだよ…。

本人もそう思ったらしく、「…俺様は攻撃に回らないほうが良さそうだな」と苦笑いしていた。

因みに、クロはサイズが更に大きくなって、昔の二倍はある。

クロはクロで強い。

素早い動きで相手の攻撃をかわし、爪や牙、たまには咆哮とか使って敵を翻弄している。

速さは普通に俺を超えているし、多分、一般人には残像すら見えなはずだ。

……怖いね、この二人。

「おい、何泣いてるんだ…さっさと行くぞ?」

ワフツ！（グイグイ）

「いや、これは汗だ！

…ってクロ、引っ張るな！ 服が千切れるから!!」

端から見ると身長130cm程度の幼女が二倍以上の狼に襲われる様にしか見えなくね!?

…何とかクロを説得して放して貰った。

ここで服千切れたら色々と困る。

「…じゃあ、行く…って、クロ如何した?？」

取りあえず街へ行こうと森を抜け、街道に出て、ゼウスと歩きだそうとしたのだが、クロは森のある一方を見つめながら動かない。

クロは一瞬こちらを向いたが、視線を戻すと駆け出した。

「ちょ!? 速えっ! 見失っちゃっ!！」

「クロの奴…何か見つけたのか」

俺達はクロを追い掛けるため、森の中に再度足を踏み入れた。

6・幼女発見しました。(前書き)

暫くぶりでごめんなさい！1110r z

出校日の後、旅行行ってたんですー！！<>…;

…そして旅行先が圏外の件について…。

…はいい、言い訳です…。

…誤字脱字がありそうな気g)r y

6・幼女発見しました。

《side:????》

「悪に裁きを!!」

おお、と喚声が上がる。

一人の外套を羽織った男がこちらに近付き、松明の炎を私の回りに放った。

無力化され、十字を模した簡易な木に貼付けられている私は身動きが取れるはずも無く、放たれた炎は瞬く間に燃え拡がり、私を今にも燃え尽くさんと赤々と揺らめいている。

約100年前のあの日、両親を殺され、あの男に吸血鬼の真祖にされた。

それからは苦痛との闘いの日々だった。

幾ら怪我をしても治る、歳をとらない不老不死の身体。

人を殺しても何とも思わない心。

約100年前を境にこの身体はただの子供から“バケモノ”になっ
てしまった。

10歳の誕生日のあの日、あの男に目の前で両親を殺された。

苦手になってしまった日の光、吸血衝動等を克服し、あの男に報復した後、住む場所を転々と変えながら過ごしてきた。

気付かれるのを恐れ、極力人との接触を避けているのにも関わらず、人里に住むのは“寂しかった”からかもしれない。

何度両親が居たあの頃に戻りたいと思った事か。

まだ真祖になったばかりの頃、“助けて”と言い続けた事か。

私を殺しにきた人も、それを傍観する人も誰も私の思いを解ろうとせず、言葉も聞かずに異物を見るような目で見てきた。

私が幾ら懇願しても誰も助けてくれない。

その時に痛いほど知った。

“バケモノ”は幾ら懇願しても助ける者などいない事を。

紅の壁は大気を取り込み、更に勢いを増して私に迫ってくる。

ここで死ぬのも良いかもな…。

怖くないかといえば、怖い。

今まで死にかけた回数は数え切れないくらいあった。

でも、“死にかける”のと“死”は違う。

大切な“なにか”を失った様なそんな恐怖に誘われた。

酸素が不足して徐々に視界が、思考が闇に沈む。

私はこの時“悪”で“闇”なのにも関わらず、初めて怖いと感じた。

「誰か…誰か助けて」

助けて、と気がついたら声を出していた。

それは声を出した自分が驚く程弱々しく、か細く、震えていた。

《side:レイ》

こんにちはっ！

絶賛クロを追いかけて中のレイだっ！！

ってか、クロの奴早過ぎる…。

こっちは魔法で補助してるのに…何なんだよあの速さ…！！

軽く音速越えてるぞ!?

…まあ、いいや。

気にしたら負けなんだきつと。

だってクロだもの。

…そんな阿呆な事を考えながら走っていると、急に開けた場所に出た。

「村か？」

「そつらしいな」

森の中にあるとは…。

生活水準は町よりは悪そうだけど比較的住み易そうなのどかな村だな。

いや、そんな事はどうでもいい。

何故人を見掛けない…？

「レイ、村人はあつちが集まってる様だぞ」

「…行ってみるか」

ゼウスが丘の上あたりを指を指しながら振り返る。

急いで駆け寄ると勢い良く燃え盛る炎を村人らしき人々が囲んでいた。

え、ナニ？

キャンプファイヤーやってるの？

この真昼間のクソ暑い時に？

『んな訳無いだろう…』

『…ですよー』

ゼウスに念話で突っ込まれた。

あ、念話を使っではいるけどまだ仮契約してないからな？

決して魔法陣の書き方が分からないからではないよ？

『とりあえず、レイ、その村人A（笑）に聞いてみる』

『りょーかい』

適当に居た村人A（笑）の服の裾をひっぱり、秘技 上目遣いを使う。

「あの…お兄さん」

「なっ、何だい？ 嬢ちゃん」

彼は服の裾を引っ張られ、怪訝そうな顔をして振り返ったが、俺の顔を見た瞬間表情を緩めた。

ふっ…ロリ歴300年は伊達じゃないぜっ！（笑）

…あっ、て事は女く男になるんだよな？

……………ぐあああ…。

…っていかん、村人A（笑）が怪訝そうな顔をしているっ！

「今日はお祭りなの？」

「いや、違うよ。」

この村に忌わしき吸血鬼が居たから今駆除してるんだ…って嬢ちゃんに言う様な内容じゃないわな」

内心慌てながら聞くと村人A（笑）はやや眉を潜めニコニコしながらそう言った。

周りを見ると他の村人達は俺達に気付いたのかこちらに顔を向け、「嬢ちゃん、坊主、危険だから離れてなさい」的な事を言ってきた。

ふーん、そうなのか。

…。

……。

……………。

つて、ちょっと待て。

危ない危ない…「今からパチンコ行ってくるから家で大人しくして
るよ？ な？」的なノリで言われたから軽く流す所だったじゃねえ
かっ！？

えー、要するに火炙りの刑の真っ最中？

…ああ、そういうえば徐々に減少傾向だけど魔女狩りやってたな。

そうかそうか…って止めるよ自分！？

俺は周囲の制止の声を完全に無視して炎に向かって足を進ませる。

近付いてみると炎の壁の先には俺と同じ年ぐらいの幼女が十字の木

の板に手足を縛り付けられていた。

「誰か…誰か助けて」

彼女は今にも消え入りそうな程震えたか細い声で呟くと目を綴じた。

ちよ！？

炎の所為で酸素不足で酸欠なのか！？

これ、かなり危ないんじゃないのか！？

早く火を消さないと！！

大慌てで腕を横に振ると、炎は燃やす物が無くなったかのように威力が弱まった。

水とか氷とかを出して鎮静化するのもアリだろうけれど威力加減出来なさそうだから敢えて炎が消える様に炎自体を操作した。

「大丈夫！？」

「……………へ？」

良かった…まだ意識はあるらしい。

突然の出来事について行けないのか少女はポカーンとしたままだ。

「……おい？」

いつの間にかゼウスが少女の前で手を振っているが、彼女は固まっ
たまま動かない。

返事がない ただの少女の様だ

…ってそんな事を言ってる場合じゃない。

我に還るまで待ってたらラチが空かない気がするのでナイフでロー
プを切り、彼女を抱える。

「…まさかお前達はあの賞金首の…！」

うおっ！？ バレたっ！？

って言うかこんな村にまで伝わってるのか俺達の事っ！？

「っ！ クロー！」

ワッ！

「ゼウス、ナイスっ!!」

「……ええっ!?!」

まだ混乱に陥ってるらしいけどこの際無視だ!

村人に気付かれかけたのでクロを呼び、背中に飛び乗る。

クロは追い掛けて来る人を颯爽と飛び越え、森の中に駆け込み、撒いた。

…ってか、クロ、お前今まで何処に居たんだ…?

7・兄妹になりました。(前書き)

エヴァの性格が変わっている様な気がします…。(汗)

キャラ崩壊な気が…原作キャラは難しいですね…;

今更2話目が途中から消えている事に気がつきました。

申し訳ありません…;

7・兄妹になりました。

《side:レイ》

あの後何とか逃げ切った俺達。

「ありがとな、クロ」

ワフッ

後ろから追い掛けて来てないのを確認した後、クロから下りる。

…うーん、空さっきまで晴れてたのに曇ってきたな。

「…い…」

彼女、疲れてるかもしれないし、今日はここで一晩過ごすか。

「…おいつ…!」

「ん?」

振り返るとこっちを見てプルプル震えてる幼女がいた。

あ、いけね…放置してた（笑）。

「…どっして」

「…？」

「どうして私を助けた！？ 私は吸血鬼の真祖なんだぞ！」

「え？ 助けてって言ってたからだけど？」

「ま、まあ…そうだが…私が怖くないのか…？」

え…何が？

「どの辺に怖がる要素が有るんだ？ 可愛いし…」

「そうだな。 こんな見た目で怖がる奴らが可笑しいと思うぞ俺様も」

「な…ななっ…！？」

そう俺達が言い返すと幼女は眼を見開き啞然とした。

ありゃま…この子また固まっちゃってるし（笑）。

というかこの子…もしかして…？

「…ちょっと待って、君の名前は？」

「あ、ああ…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

「成る程、【闇の福音】か」

「キティちゃんだな」

「誰がキティだった！！ それに口調とか変わってないか!？」

おおう、鋭いツツコミがきた。

「冗談冗談…あ、そういえばこっちの自己紹介もしないと。俺は
レイ、こっちが素」

「俺様はゼウスだ」

「…もしかして【流星騎士】と【神帝】なのか？」

…え、何ソレ？

…なんという厨二…。

というか、【神帝】と【流星騎士】ってかなりのをえてるな…。

偉そうに踏ん返り返ってるゼウス。

いつもパシリな俺。

多分“流星”には【魔法の射手】を雨の様に降らせる事の他に俺自身の特効させられてる事も含まれてそうだな。

もしかしてゼウスこいつ、それを知っていてあの発動キーに？

……………。

「な、何だか良く分からないが大丈夫か？」

落ち込んでいるとエヴァが慰めてくれた。

いい子過ぎる…。(泣)。

「…ありがとう、もう大丈夫だ」

「そうか」

笑顔で礼を言つとエヴァは照れながらプイツとそっぽを向いた。

…ヤバイ、何この可愛い生き物。

「…あ、そっだ！」

「ん、如何した？ ゼウス」

「エヴァ、俺様達の妹にならないか？」

「な、なんですとー！？」

エヴァが何か言う前に俺がテンパって叫んでしまった。

勧誘！？

ゼウスが！？

…まあ、でもエヴァが妹になる事に異論は無いな…。

「…いいのか？」

「良いぞっ！ 俺様が長男、次にレイが長女、次女がクロ、三女がエヴァだな」

ゼウスは腕を組み「兄妹は良いものだ」と嬉しそうに何度も頷いている。

…ってちょっと待て。

「クロ…お前メスだったのか…？」

ワフツ！（コクリ）

「知らなかったのか？」

「三女か…」

し、知らなかったぞ！？

それに若干一名嬉しいのかトリップしてるし！？

「エヴァ、そんなに嬉しいのか？」

「…今まで一人だったからな」

エヴァは何処か悲しそうにフツと微笑んだ。

そうか…そうだよな…。

吸血鬼の真祖に無理矢理変えられただけなのに人々は殺そうとしてくるんだからな…。

「寂しかったよな…辛かったよな…これからは俺達がいるから…」

「…っ」

思わず抱きしめるとエヴァは堪えきれなかったのか声を押し殺しながら泣きはじめた。

暫く背中を摩つたり、頭を撫でてやると落ち着いたのでかもしもぞ動き出した。

腕の力を緩めると恥ずかしそうに離れた。

「レイ…お前、告白みたいだったぞ？」

「「な…!?!」」

その間此方を微笑ましそうに眺めていたゼウスが爆弾を投下。

二人掛かりでボコボコにしてやった。

この後、エヴァは野宿だと思ったらしく、俺が魔法で建てた日本家屋（ム力つく事にどっかの三兄妹の馬鹿でかい家しか詳しく知らない為、かなり似せてある）に驚いたり、ゼウスの歳に驚いたり、とにかくカオスな一晩を過ごす事になった。

ゼウスの歳？

……“0”が20個越えた辺りから数えるのを止めたそう。

そこまで良く数えたな…。

「なあ…」

「ん？」

「なんだ？」

「レイ…何で一人称“俺”だったり男言葉なんだ？ 見た目に物凄く似合わないのだが…。

ゼウス…“俺様”は今時どうかと思うぞ…？」

「……！！！！」（汗）

寝る直前、少し離れた敷布団の上から届いた言葉に、俺とゼウスは口許が引き攣った。

“俺”を捨てると昔の男だった自分が消えないか！？

しかし、正直言うと年月は圧倒的に女＜男なんだよな…。

エヴァの言う通り“俺”の潮時か？

確かに最近“私”の方が多くなりつつあるな…。

これは、相手の前でボロをださない為にも“私”に統一した方が良
いかもしれない…。

そういえば、エヴァも男言葉っぽいのが似合っているもんな…。

ああ、どうすれば良いんだド えもんっ!!!

…この日、真剣に悩む事になり、一睡も出来なかった…。

ん？で、どうする事にしたのかって？

徐々に直す事にしたよ…。

ゼウスも“俺様”から“俺”にしようと躍起になってるし…。

…妹パワー恐るべし!!

8・空から何かが落下してきました？（前書き）

短いです…；

何かまた一人増えました。

もの凄く各キャラが個性豊かになりそうな件について…。

誤字脱字があるかもです。

8・空から何かが落下してきました？

《side:????》

知らない天井です。

…僕の部屋は薄緑だったので白く無いハズですし。

…ここは何処なんですかね？

ムクリと起き上がると目の前には黒い城があり、僕の周りには金色の花がありました。

……………エッ、魔王城？？

起きたらラスボスって、どんな嫌がらせですか…。

「い、いや、違っのだが…」

僕が思考していると戸惑った声が聞こえてきました。

振り向くと、何処かで見たことがある真っ白の優男と真っ黒の無表情男と金色の美女がいます。

…あ、違っんですか。

じゃあ、ここ、何処なんですか？

「驚かないんだね…。ここは何処にも属さない空間だよ」

「因みに私達は神です」

酷く抽象的ですけど…僕はもしかしてテンプレ的に誤って殺されて転生パターンでしょうか？

何せ、目の前には神様がいる訳ですしね。

「いや、そうではなく…死に方が余りにも哀れみを誘うものでしたので転生させて差し上げようかと…」

…そうだったのですか？

死ぬ時に脳にショックを受けたのかその時の記憶が無いのですけど…。

「僕がまとめた記録に寄ると…“高校の新人体育科教員、中学校に出張し、教材運ぶ手伝いの最中、たまたま廊下に落ちていた給食の時に出てきたバナナの皮を踏み、バランスを崩し、転倒。そのまま階段から転落死”なんだけど…」

……………。

何なのでしょう…【死因：バナナの皮】って。

とても情けない死に方なのですが…。

…きっとあちらの人達は爆笑しているでしょうね。

黒歴史…聞かなければ良かった気がしてきました…。

「…まあ、向こうの人の中から君の記憶は消しておいたから安心して？」

…ありがとうございます。

所で、転生するにあたり、何かチート的な能力とか貰えるのでしょうか？

「はい。（因子があれば神に変換出来たのに…この人全く持ってないですね…非常に残念です）」

何故か今とんでもない口外を聞いた気がするのですが…きっと気のせいでしょう、そうに決まっています。

能力の個数って決まっていますか？

…後、何処の世界でしょうか？

「個数制限は特に無い。 “ネギま!” に非常に良く似た世界だと思ってくれば良い」

“ネギま!” ですか…。

ある程度強くしておかないと死ねますね。

んー…………。

では、ドラゴンボールの悟空やブロリー並の補正…タフさとか、技をモノにする凄さとか、鍛えれば鍛えるだけ強くなる、とかが欲しいですね。

後、転生直後は気がジャック・ラカン並欲しいです。

後は自分で鍛えて上限上げたいですし。

ああ、魔力は無くても良いです。

咸卦法は無くてもそれだけあれば充分ですので。

「…それだけでいいのかい？」

自分で鍛えないと慢心して付け上がりそうぞ。

体育科教員をやつてる所で判るかもしれませんが、僕の好きなんですよ。

それに、ドラゴンボールの技使つてみたいですし。

…これでもオーバーキルな気がするのですが。

「…そうだね。」

まあ彼等もいるし、問題ないかな？　ただ、保険として、不老不死とその他諸々つけても良いかい？」

…はい、それでお願いします。

所で彼等というのは？

「向こうに行けば判るよ。　彼等の近くに飛ばすから」

なるほど、さいですか。

「じゃあ、そろそろ飛ばすけど良いかい？」

はい、ではよろしくお願いします。

「頑張つて下さいね」

ええ…って何故地面に穴が開くんですかつ！？

これは“飛ばす”ではなく“落とす”ですからあああああ！？

「「「いてらー」」」

僕の心の叫びを完全に無視した三人は僕の下に穴を作って落としやがりました。

呪つてやる…。

《side:レイ》

こんにちは。

エヴァに言われて“私”に統一しちゃったレイだよ。

あれから数十年経つて、すっかりゼウスと私はシスコンに…。

しょうがないじゃん、だってエヴァだもん。

…可愛過ぎるんだよおおおおっ！！

「なあ、姉様」

「ん、何？ エヴァ」

あ、エヴァは私の事を姉様、ゼウスを兄様と呼ぶ様になった。

…初めて呼ばれた時、余りの可愛さに悶絶したのは…秘密だよ？

「魔法世界に行きたい」

「良いよーエヴァが行きたいのなら」

「即答！？」

そりゃあ妹の願いは出来る限り叶えてあげないと。

さて…どうやって行こうかな？

…いつその事、ゲート創っちゃおうか？

「そつだな、創った方が後々便利だろうと思っぞ？ 俺も」

9・啞然としました…。(前書き)

… やっちまった感があります。

でも、後悔はしていません、多分！

… 後で泣いてるかもですか…。

そして、何故かフラグが…！？

勿論あの方です。

9・啞然としました…。

《side：レイ》

前回、空から何かが降ってきた！

隕石なのか…はたまた宇宙人なのか!？

…続きはCM2の後で（キリッ

「レイ、それはどうでも良いから見に行くぞ」

「…ハイ」

あれ、ネタが通じなかった？

…ま、いつか。

森の中を少し進むと、巨大なクレーターが出来ていた。

恐る恐る（笑）覗き込んでみると…？

……………。

これはどうリアクション取れば良いのかな…。

目の前どこぞの一族よろしく、上半身が地面に埋まっている子供が

…。

そしてどことなく見た事があるあの派手なオレンジ色の服…。

「…見なかった事にしよう」

「「だな」」

3人+1匹はシンクロしたかのように同時にくるりと踵を反す。

「げほ、げほっ…ち、ちょっと待って下さい」

……チッ

もう少しでスルー出来たのに…。

気づかれた…。

「こんな森の中で君達みたいなお子供がうろついちゃいけません。

森というのは危険なんですよ？　そして、助けてください」

ん…？

埋まってるのに…何で子供だと気づいた？

というか人の事言えないと…。

「まあいいや、取り合えず助けよう」

「そ、そうだな」

右足を私とエヴァ、左足をゼウスとクロで持つ。

…あ、クロは足を持ってないから布を巻き付けたのを口に加えている。

…この構図、何処かで見た事が…？

気の所為だね、きっと…！

「じゃあ行くよ…！」

皆それぞれ適当な掛け声と共に引っ張る。

余りにもカオスな掛け声なのでその辺はご想像にお任せします。

1秒後。

ズッポーン！！

マヌケな音と共に彼が中を舞う。

彼は落ちる瞬間に受け身を取り衝撃を殺しながら転がった。

「ふう…ありがとうございます」

流石に死ぬかと思いましたがよ、と苦笑しながら立ち上がる彼の顔を見て私達は固まった。

いや、正確には二人。

エヴァとクロはそんな私達を見て頭に疑問符を浮かべている。

…そして私とゼウスの声が八モる。

「「…エイトのチビVer.だと!?!」」

まさかの展開だった。

彼はドクエ?のあの主人公を幼くした感じの見た目だった。

そしてオレンジ色の上着…いや、胴着には“亀”とかでは無く“三神”って書いてある…。

しかも急いで作った様な適当さで。

……絶対あいつ等だ……。

つてか、“三神”とか……センス無いね。

それなら“三振”とか“三線”にしとけば良いのに……（笑）。

それにエイトっぽい顔と胴着合ってない。

エイトって……胴着着る様なタイプと違うと思うんだけど。

一応騎士だし。

やっぱりバンダナだよな!?

「え、チビ……!?! いや、そうではなくて……何故僕の名を……」

あ……同じ名前だったんだ……（汗）

驚愕しているエイトに無言で鏡（何処から出てきたかはツッコんじやいけない）を向ける。

……ジューツ（顔）

…………ジューツ（服）

……ジイイーッ（顔）

「……フフツツ……ドラ エですか……それに目線が低いなと思ったら……」

暫く鏡を見つめていたけど、不気味に微笑みだした。

バツクに黒い炎が……。

でも、私も同じ境遇なんだよね……。

……。

……ハハツ、あれ？何かあの三人を抹殺したくなってきたよ？

「あの三兄妹……いつか殴りに行く……」

「……っ！！ その時は御一緒させて下さい」

「いいよ？」

その為に色々準備しとかないとね……何せ相手は気の遠くなる程長生きした神の中のエリートだし……」

「僕も手伝いますよ。やるなら徹底的にしなくては」

「……フフフフ」

後で聞いた話だけど…私が悪ノリ（最後は結構本気だった）をした所為で、ゼウスが魂抜けた顔で「うわ…バカ三兄妹の親の俺…オワタ」（＾o＾）／」と呟いていたそうなの。

「まあ、とにかく自己紹介しよう」

数分後落ち着きを取り戻した私。

お互いの事を知らないから自己紹介しないと始まらないし。

「まず、私からいかせてもらおう。

私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル…【闇の福音】だ。

姉様やぼーずみたいな転生者には有名らしいがな」

踏ん反り返って不敵な笑みを浮かべた。

そんな事をしてても可愛いだけなんだけど…言わない方が身の為かな。

あ、エヴァには私達の事はもう言ってるよ。

「なるほど。まさか転生早々会う事になるとは…」

確かにいきなり原作キャラに出会えたから驚くよね。

ある意味運が良いのかも。

「で、姉の一人のクロだ」

ワフッ！！

「…？ って、かなり大きいですね…魔獣ですか」

「そうだ」

エヴァは私を“姉様”、クロはそのまま呼んでいる。

ややこしくなるからだとか。

エイトは近寄ってきたクロの首に抱き着く。

自分よりも大きい相手に怯えもしないね。

…だから彼等が選んだのかもしれないけれど。

「…あ、私はレイ。無理矢理あいつらに神様に変換されて…只今神様見習いやってます。

1000万ドルの賞金首…因みにまだ人殺した事無いよ」

そりゃあ逃げ回ってるだけだし。

多少怪我をさせてはいるけど逃げてるだけなのにこの金額破格過ぎじゃない？

相手にとっては殺される事無いんだし安全過ぎる賞金首だよね…。

「俺はゼウス、最高神だ。同じ額の賞金が賭けられている。因みに【神帝】と呼ばれているな」

「えっ…そうなんですかっ!？」

お、驚いてる驚いてる。

そりゃあ驚くよ、初めは誰でも。

…別の意味で。

「因みにレイは【流星騎士】と呼ばれている」

「二人と目的を獲てますが、厨二臭いですね……」

何か呆れられた。

ま……まあ、当てる所か真ん中ぶち抜く勢いぐらいだからね……。

「兄様達はそれが1番有名だが、他にもある」

「……………へ？」

そんなの初耳なんだけど？

「兄様は【狂乱暴走皇帝】、【無茶苦茶偉そうなヤツ】」

…うん、当たってる。

「クロは【風神】だ」

ワフッ

クロにも有ったのか。

何か格好良いな…。

「姉様は【皇帝様の大事な鞘】、【究極射手使い】、【何方かお持ち帰りの許可下さい】 e t c …」

「なるほど…って待て待て待て」

【皇帝様の大事な鞘】ってのはいつもゼウスが攻撃しようとするのを止めているからだと思う。

前に魔法使わない宣言してたのに。

実際は、大事に発展させないでほしいだけなんだけど…。

【究極射手使い】も分かる。

最近、各1500矢まで無詠唱タメ無しで出来る。

ここまで極めた人いないんちゃう？って思うぐらい【魔法の射手】練習したし。

正直これ程応用利く魔法無いと思うんだけど…。

「でも、最後は何っ!？」

しかも“ e t c … ”で。

まだあるの…！？

「…【何方かお持ち帰りの許可下さい】は今の所一人しか使っていないが…知りたいか？」

嫌な予感がする…！

全身が答えを拒絶する様に震えだす。

私は首をブンブン振って断った。

「因みに、【逆刃刀】 【最強ギャグ補正】 【歩く世界遺産達】 【練習台に打ってつけ】 【え、あいつらに勝てるヤツいんの？いなくね？】 【何あの可愛い生き物】 が私達のグループ名の様に使われているらしい」

…もう、ノーコメントで。

10・謎の人物が出現しました。(前書き)

遅れてしまってすみません…。

今回出てきた学校名、あんまり関係ないので忘れちゃって全然おっけーですww

というか、やっとここまでこれた…！

誤字・脱字、感想、批判等受け付けています。
気楽に書いていただけると嬉しいです！

ではでは、どうぞー。

修正しました。《9/10 中等部 高等部》

10・謎の人物が出現しました。

《side:レイ》

「…ま、まあ、それはおいておいて…はい、本題行こう?」

「そ、そうだな! 確か…エイトだったか?」

「え、ええ…僕は藤咲英翔ふじさきえいとと申します。

前世は…学校の体育科の教師、弓道部の顧問をしていました」

気まずい沈黙を私とゼウスで無理矢理破る。

ふーん、名字って藤咲なんだ。

……。

…フジサキ?

「…レイ如何した?」

「顔色悪いですよ?」

あははっ…そりゃあ悪くなるよ。

私の予想が当たったら……ってかほぼ当たりだと思っけどなあ……。

「……エイトって、何処の学校の先生だったの？」

「惶鳳学園高等部ですが……」

やっぱり……。

って事は……

「私のクラス担任……」

「えっ？ 僕のクラスの中に女子で亡くなった人はいな……あ」

気がついたらしい。

女子にはいないけど男子にはいる事。

神と名乗った三人に似ている人物が学校内にいた事。

彼等と私が仲が良かった（？）事。

そして 彼等の性格を。

「……もしかして、水無月光一君ですか？」

「はい、そうですよ藤咲先生。今はレイと名乗っていますが」

久しぶりにその名前で呼ばれた気がする…。

惶鳳学園っていうのは小・中・高等部と大学・大学院がある世界的に見ても大規模な学校。

普通、エスカレーター式が当たり前なんだろうけれど、この学校は特殊で毎回超難解な受験を受ける事になる。

いくら定員割れをしても点数が悪くないと落とされる為、世界中から受験生が来るといふのに、通える人数は非常に少ない。

更に、定期テストで点数が悪いと強制退学という…恐ろしい学園でもある。

つまり、通っている奴らは天才を超えた「え？お前本当に人間？」の集まるトンデモ学校だったりする。

もちろん彼等も通っていたよ、兄二人は同学年で。

…え？

たいして頭良さそうじゃ無いのに何で私が通ってるのかって？

どっかの誰かさんの陰謀のせいなんだけど…。

…どづいう陰謀なのかはご想像にお任せします。

「まさか、転生先でまた会えるとは…。

それにしても君もある意味災難ですね…」

「……もう慣れました」

笑顔で返すと、哀れみの視線を送られた。

…何かくじけそう。

「ああ、僕の事はエイトで良いですよ。

いくら元クラス担任だとしても僕はこちらの事はマンガでしか分かりませんので赤子同然です。

後、敬語は要りません。如何やら今では君の方が年上みたいですからね」

「わかり…分かったよ、エイト」

うわぁ…間違えるね、これ。

「決まりだな！ ではエイトはこれから次男だ!!」

「…は？」

ゼウスの突然の言葉に硬直するエイト。

「まあ…ここにいるメンツは何だかんだ言って皆一人だから義兄弟姉妹関係を結んでるんだよ。」

特に深い意味は無いよ」

クロは知らないけれどね！

「…なるほど、面白そうですね。前世は一人っ子でしたからこういうのも良いかもしれません」

お、案外早く承諾した。

賞金首だけど、そのデメリット以上に一人の方が嫌だったのかな…？

それとも、同郷で知り合いだから？

というか、こんな森の中、サバイバルスキルが無いと生きていけな
いから選択肢無いともいえる…ね。

「因みに、長男がゼウス、長女が私、次女がクロ、三女がエヴァだ

「よ」

「わかりました、これから宜しく願いします」

エイトは角度60度の洗礼されたお辞儀をした。

傍らから見ると幼児と幼女の集団だから…シユールな気がする。

まあ、そんな事は置いといて…

「エイト、これからの事なんだけど…魔法世界行こうと思うんだけど、良い？」

「全然良いですよ。予定とかはありませんし、何より僕も行ってみたいですね」

お…？

こつちも普通に了承の返事が貰えた。

「じゃあ行くのは決定だね。

まず、どうやって行くのかだけ…」

「確か何処かにゲートがあるのでは？」

「それはそうなのだが、探るのが面倒という事で姉様が創るらしいよ」

「…流石規格外」

…う、うるさいやいッ！

自分でも時たま思っけれど…。

「レイ、どれぐらいの期間で出来そうなんだ？」

「魔法球無しで3日程度あれば」

「私が昔創った魔法球で3時間か…」

「俺のだと3秒だな」

「兄様のは可笑しいんだよ…6分5秒が一年相当とか普通に変だか
らな!？」

6分5秒で1年って事は1時間で約10年だよね…？

じゃあ、1日で約240年…？

エッ、何ソレコワイ。

考えちゃダメなんだよ自分…。

…って、何か言い合い始まったけど、スルーしとこう。

私はモゾモゾと自分の亜空間を漁って自分の魔法球を探した。

という訳で現実世界で3分、魔法球内で3日経った。

私の魔法球は1分が1日。

流石にゼウスみたいなのは創れないよ…？

でも、十分金額が付けない程の物だとは思っけど。

やっと魔法世界に行けるとルンルン気分が魔法球から出てくると…
他の奴ら全員カップ麺食ってやがりました。

…私はタイマーかつ!？

「レイ…悪かった、お願いだから機嫌を直してくれ…」

地面に“の”の字を書き始めた私をゼウスが慌てて宥めだした。

………むう。

「…はあ、とにかく出来たよ」

亜空間を漁って例の“モノ”を出すと全員が啞然とした。

…え、何で？

「…ちっちゃくないか？」

「小さいな」

「小さいですねえ…」

くうん…。

「えっ、そう？ 確かに本来のゲートよりかなり小さいけど」

「かなり所じゃないと思うのんだが…」

「それもそうなんですけど…形状に見覚えが…」

私を取り出した“モノ”。

縦150cm、横50cm、奥行き15cmで取っ手の付いている
ピンク色の長方形の板状の“モノ”。

「確か姉様の前世の時に存在したらしい某国民的キャラクターの自動操縦型未来猫型青狸ロボットの異次元ポケットに入っているテンプレアイテムのどこもドアって言うモノじゃなかったか？」

「うん、そうだよ」

そのMiniver.だけだね。

エヴァ、それにしても良く覚えてたね…？

「…ひとつ質問なんですが…」

…ん？

なんだろ…？

「クロはどうするんですか？」

「あ……………」

あああああああつ！

クロ通れないじゃんっ!？

やっちまったああああ

!!!!

大事な大事な妹のクロの事考えて無かったなんて姉として最低じゃんっ！！！！！

サイズ考えずに創っちゃったとか、あり得ないっ！！

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

何処かの不幸少年も真っ青の超高速土下座をクロに向けてやった。

途中で勢い余って地面に額を打ち付けたのか視界が赤く…いや、その程度、忘れた罪と比べたら軽過ぎる！！

くっくん…

数回やっている、クロが近付いて来て、顎の下に鼻を押し付けてきて私の土下座を制止させた。

「クロ…許してくれるっっていうの…?」

こんな私を…?

涙と額から流れる血でグチャグチャになっている私の顔を慰める様にペロリと舐めた。

優しい…優し過ぎる…。

今度は別の意味で涙が…。

もう既に見られていたから今更感が拭いきれないけど…私は恥ずかしくなって俯いた。

ギョッ…

誰かが私に抱き着いてきた。

相手の片手が私の頭の上に置かれ、慰める様に往復し始める。

む…誰だろう…？

このシャンプーの匂い…ゼウス？

でも、若干違うような…。

髪の毛黒いからエイトかな…？

「レイ姉は、悪くない」

鈴がなるような可愛い声が耳元で聞こえた。

えっ……誰？

11・魔法世界に行きました！（前書き）

今回は後半書いてて楽しかったですw

ノリとテンションで書いたのでヤバい事になってそうですが……

キャラ設定も書いたのでよろしかったら覗いてやってください。

それではごっぞー！

11・魔法世界に行きました！

《side：レイ》

「レイ姉は、悪くない」

結構強い力で抱きつかれてるから身動きが出来ない。

…私に抱きついていて謎の人物。

声からして女の子っぽいけど…。

「…あのく、ごめんね？ く、苦しいから…」

「う…ごめん、なさい」

遠慮がちにそういうと、相手は慌てて離れてくれた。

呼吸を整えて見上げると…。

なん…だと!？

む…無茶苦茶可愛いっ!？

ふわりと内側に緩くカーブしている濡羽色のショートカットの柔らかそうな髪の毛。

眠そうに半分閉じている深紅色の大きな瞳。

顔のパーツひとつひとつ整っていて幼い顔立ちに拍車をかけて更に可愛い印象を持つ。

顔は無表情なんだけど眼が申し訳なさそうにこちらを見てきていた
…！

やばい…鼻血でそう。。

「大丈夫…？」

「う、うん…所で君は…？」

「クロ」

……。

な、なんですとー！？

「く、クロって、あのクロ？」

「……」（こくろ）

え…どづいつ事？

人に変身する事なんて今まで無かったよ…？

「何で人間に…？」

「わからない…。レイ姉を抱きしめたいと思ったら…」

こてんと横に首をかしげるクロ…可愛すぎるよ…。

「あーそれなんだがな…」

ん？ ゼウス、原因分かるの？

「多分…レイの血を舐めたから契約が完了して、魔獣から神獣に変換されたんじゃないか？」

「…契約って…アーティファクトが出てくるアレ？」

「いや、そうじゃない」

ゼウスは首を振った。

ん、じゃあ何？

「神の使いとしての、だ」

「…マジで？」

「マジ、だ」

確かに魔方陣書いてないからパクティオーじゃないとは思ってたけど…。

「神にもあるの？」

「ああ、俺が勝手に作った制度だけだな」

そんな話聞いてないんだけど？

「具体的にどんな効果が？」

「ステータス・能力の一部譲渡、念話、視界の共有など…まあ沢山ありすぎて全ては言い切れないが…まあ、チート能力だ」

「…強すぎだろ」

「クロが魔改造…いや神改造されましたね」

つまり、私の能力をクロに渡してヒヤッハアアー！（笑）が出来たりするんでしょ？

使用様によっては“敵？何ソレ美味シイノ？”状態じゃない？それ…。

「まさか魔獣と契約できるとは思わなかったが…人になれるのは、おまけで付いてきたのか？」

制度の製作者が分からないとか…。

また宇宙意思によるご都合s（略）

「…これで、ついて行ける」

まあ…クロが嬉しそうだからいつか。

「…って毎回目的と逸れてるし…じゃ、気を取り直して…魔法世界に行こう」

という事でやっと魔法世界に行きました（汗）

「さーで、やって来ました魔法世界！」

「いきなりどうしたんだ姉様」

「何か言わなきゃいけない気がしたんだよ……」

エヴァの生暖かい眼差し！！ レイに7000のダメージ！！

……ってふざけてる場合じゃ無かったね。

どこ もドアを抜けた先は鬱蒼と茂る森だった。

……えーっと、此处は何処？

「誰か地図持ってない？」

振り返って四人に聞くと全員同時に首を振る。

……ですよー。

どうしよう、と少しの間思考に耽っているとクロが私の服の裾を引っ張ってきた。

「……あっち、町がある」

指を指した方向を見てみるけど…木が邪魔で見えない。

「見えないけど…何で分かるの？」

「…パンの匂い」

「食べ物匂いですか」

「なるほど」

確かにクロは嗅覚良いから分かるかもね。

クロは絶対嘘をつくような子じゃないから多分町はある！！

「そっちに行ってみるか」

「はい」

どこもドアを仕舞った後、私達は半ばピクニック気分です。

30分後

大きな町がありました！

凄い、人がいっぱいいる！！

「クロ、凄いよっ！！」

「…む」

嬉しくて思わずクロを抱きしめるとクロは頬をほんのりピンクに染めて表情を微妙に動かした。

多分照れてるんだね！

この表情…エヴァも可愛いけどクロも可愛い…。

「ねえねえエヴァ、クロ、お店見に行こ？」

そろそろ手持ちの服変えたいし、デザインを参考にしたいんだよね
「ね」

ん？

“デザインを参考にしたい”ってどういう意味かって？

ふふふっ、裁縫スキルを手に入れたのだよ明智君。

……流石に300年（+魔法球の時間も入れると正直1000歳余
裕で越える……）も女子やっていたら身につくよ。

「…行く」

「姉様、あの店見に行かないか？」

エヴァが指を指した店は…ロリ服専門店でした！。

昔の“俺”なら泣いて拒否していたかもしれないけど……

「いいよ、行こう！」

幼女として生きていく事を決めた私には怖いモノなんて無い！！

エヴァとクロのお気に召す服を作ってみせる！！

「……………俺達どうしよう」

「……………此処で待ってるしか無いと思いますよ？」

「確かに店内に入るの……」

「ですね……」

…待ちぼうけを喰らった幼児二人組がいたとかいなかったとか。

2時間後

「ふう、いっぱい買った」

生地とかレースをね！

此処の店、服だけじゃなくて素材も売ってたんだよ。

これを魔改造すれば、防具も兼ねそう。

「姉様、期待していいのか？」

「もちろん！」

「…楽しみ」

完成図は既に頭の中で出来ているから、後は魔法球に引きこもるのみ！

…あれ、最近引きこもり多くない？

……キノセイダヨネ。

「…終わったのか？」

「…女子のお買物が此処まで長いとは…」

「姉様姉様、あの店も覗いて良いか!？」

「…クロも、行きたい」

「良いよ、行こ行こ」

「……………」

その日、白く燃え尽き、何かを悟った様な表情の幼児二人組がカフエの机の上で干からびているのを多数の人が目撃したそうなの…。

その片方が高額賞金首と気が付いた賞金稼ぎや魔法使い達はこの日ばかりはそっとおいてあげたらしい…。

プロフィール+現在のステータス (前書き)

やっちゃまった感じがします…。

だが後悔はしていない!!! ハズ?

急いで書いたので後で編集するかもしれません。

プロフィール+現在のステータス

何処かのRPG?風表記です。

EX SS S A B C D E F

EXが一番強く、Fが最弱です。

レイ・M・マクダウェル(元:水無月 光一)
ミナツキ コウイチ

攻撃力:S

防御力:SS

気:S

魔法攻撃力:EX

魔法防御力:EX

魔力量:EX

素早さ:A

運:B

特殊能力

【神力】S…想像する事によってさまざまな能力を行使する事ができる。

【究極射手】S…魔法の射手を無詠唱(合計1000矢まで可)・応用させたりする事ができる。

【原作知識】?…前世の時の原作の知識がある。

異名

【流星騎士】 【皇帝様の大事な鞘】 【究極射手使い】 【何方かお持ち帰りの許可下さい】

容姿・その他

長髪、銀髪で毛先が若干金髪の不思議な髪色。
目は水色で顔はエヴァとネギを足して÷2みたいな感じ。

発動キ―

【ディル・ディア・ディレスト・ブローディア】

ゼウス・マクダウエル

攻撃力：EX

防御力：EX

気：EX

魔法攻撃力：EX

魔法防御力：EX

魔力量：EX

素早さ：EX

運：EX

強すぎて表記しきれません。

特殊能力

【神力】EX：想像する事によってさまざまな能力を行使する事ができる。封印されて1割のみ。

【あいつらの親】EX：レイとエイトに無条件で生暖かい眼差しを食らう事ができる。

異名

【神帝】 【狂乱暴走皇帝】 【無茶苦茶偉そうなヤツ】

容姿・その他

コードブレ カーのエペラーが銀髪金目になった様な見た目。

どうやら神力を封印されて1割しか行使出来ないらしいが、どの辺

が1割なのか小1時間にわたって問い詰めたくなるぐらい膨大。
1割がレイの全神力よりもある。

暴走しかけていつもレイに止められる。

単純。ノリ。泣き虫。でも、空気は意外と読める。

これでも一応神の頂点に立つ、偉いお方…のハズ…？

発動キ―

【ロス・チャイルディアーナ・グロリオーサ】

クロ・マクダウエル

攻撃力：EX

防御力：SS

気：EX

魔法攻撃力：S

魔法防御力：S

魔力量：S

素早さ：EX

運：SS

特殊能力

【神獣化】A：レイの血を飲んだ為、行使出来るようになった能力。
前衛系能力が更に上がる。

【不老不死】EX：何故か初期から持っていた能力。 都合主義
…？

【レイ姉至上主義】EX：つまり、度を過ぎたシスコン。

異名

【風神】

容姿・その他

ショートカットの黒髪と深紅色の目。

目はいつも眠そうに半目になっている。

レイが大好きで追いかけていたらいつの間にか仲間とはぐれていたらしい。

エイト・F・マクダウエル（又は藤咲 英翔）
フジサキ エイト

攻撃力：EX

防御力：EX

気：EX

魔法攻撃力：A

魔法防御力：A

魔力量：A

素早さ：EX

運：EX

特殊能力

【歩く百科事典】SS…前世で学んださまざまな知識を行使・応用できる。 博学。

【学校の先生】EX…人に対する指導が得意。

【弓道部顧問】S…弓、銃などの遠隔攻撃を使用できる。

【不老不死】EX…適当に追加された能力。

【原作知識】？…前世の時の原作の知識がある。

異名

今の所無し

容姿・その他

ドクエ8の主人公にそっくり。

日本人に見えなくもないので、前世の名前をたまに使う。
日ごろから使っていた所為か常に敬語で話す。
レイのとは前世で先生と生徒の関係。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

アタナシオティ

攻撃力：SS

防御力：S

気：S

魔法攻撃力：EX

魔法防御力：EX

魔力量：EX

素早さ：S

運：S

このエヴァの強さ表記はこの小説内のみです。
他の作者様の作品には当てはまりません(汗)

特殊能力

【魔法具作成】 EX：魔法具を作成できる。

【被過保護】 EX：兄弟姉妹から過保護を受けられる…。

異名

【闇の福音】 【不死の魔法使い】 【悪しき音信】 【禍音の使徒】
【童姿の闇の魔王】

容姿・その他

原作と同じ。

少し、性格が丸くなったような…気がしなくてもないような…。

“原作知識”というモノを知って「じゃあ、姉様達と一緒に私が原作には無かった動きをするのも面白しろそうだ」と密かに楽しがっ

ている様子。
かなり兄弟（姉妹）想い。
おねだりされると…誰も逆らえない様子。

発動キ―

【リク・ラク・ラ・ラック・ライラック】…原作と同じ。

その他

5人合わせての異名

【逆刃刀】 【最強ギャグ補正】 【歩く世界遺産達】 【練習台に打つてつけ】

【え、あいつらに勝てるヤツいんの？いなくね？】 【何あの可愛い生き物】

現在の年齢・身長・賞金額（魔法世界を初めて訪れた時点…1500年代後半）1600年ぐらい）

*長男：ゼウス…不明 身長：134cm 賞金額：1000万\$

*次男：エイト…28歳 身長：136cm 賞金額：無し

*長女：レイ…約400歳 身長：127cm 賞金額：1000

万\$

*次女：クロ…約400歳 身長：129cm 賞金額：700万\$

*三女：エヴァ…約200歳 身長：130cm 賞金額：200

万\$

年齢は前世分も含み、魔法球内は含んでいません。

身長はエヴァは原作どおりで…レイが一番低いらしい。

レイはエヴァと髪と目の色が似ている為知らない人には妹に間違えられて夜な夜な枕を涙で濡らしているとか…？

ゼウスが“血つながって無いけど兄弟姉妹になっちゃえ”：といった事により、あまり名乗らないが苗字が“マクダウエル”になった模様。

12・服が出来ました！（前書き）

いつの間にかPV18000、ユニーク4000人になっていて驚きました……

12日のユニークの多さに驚きです！

…深夜に見に来て下さる方いますが、いろんな意味で凄いですね…。
私も人の事言えませんが…。

今回、殆ど服装の説明でおわっちゃった様な気がします…。

12・服が出来ました！

《side:レイ》

魔法球に引きこもって約一週間…。

ついに出来たよ、皆の服がっ！！

…流石に3人のだけだとゼウスとエイトが可哀相だから彼等のも作
ったよ？

まず、私とエヴァは…レースたつぷりの色違いのロリ服！

所謂双子ファッションってやつだよ。

ぱつと見、デザインは同じだけど、レースの模様やアクセントに使
われてる宝石類の色や形が違う。

色は私が白でエヴァが黒色。

大きめのレースたつぷりのカチューシャや編み上げブーツも作った
から…完璧じゃない？

次に、クロは…前に私が日本について語ったからなのか黒い和服が
良いと言ったので、袖無しで丈が膝上の着物にしてみました！

生地は黒をメインに、所々金糸で蝶が描かれていたり、桜の花びら

が散ってる可愛いやつ。

帯は赤をメインに同じく金系の装飾が入った綺麗なのにしてみた。

ワンポイントは背中側の帯に付いている地面にすりそつな程長い幅広なりボン。

赤から白になるグラデーションで、リボンの先を赤い宝石でキュッと縛ってるのがアクセントの一品。

蝶をモチーフにした髪留め、草履とかも作ったよ？

刀も欲しいと言っていたから短刀2本と太刀1本作ってみた。

調子に乗って鉄扇とかも作ったけど…使って貰えたら良いなあ…。

次にゼウスのは何にしようか迷ったんだけど…ゼウスがいつも着てる服を参考に少しだけ変更したのを作った。

エンペラーのイメージ強すぎるし…マントが無いと何か物足りない。

上着やマントは白をメインに金系やら銀系を使用し、豪華だけど、そこまで華美過ぎない様にしてみた。

紺色のズボンと黒いブーツにも実は装飾が入っていて…一番時間をかけた気がする。

そして…ネタであの髑髏付きの王冠作ってみたよ！！

バツチリ再現したし…完璧！

エイトにはコートと遠隔武器とバンダナを作ってみた。

気が使えるのに何で遠隔武器を作るのかというところ…エイトって、前世の時弓道部の顧問やったのは知ってるよね？

そう、弓とか銃を使うのが好きなんだよ。

服の色なんだけど…見掛けがエイトでも、中身が違うから正直落ち着いた色の方が似合うし、弓とか渡して使ってもらおうっていうのに敵に場所がばれる様な派手な色はダメだね…という事で、コートが枯れ草色、バンダナは若草色という緑系にしてみた。

中の服なんだけど、コートを羽織るのでシンプルにしてみた。

遠隔武器の方は、何が良いのか分からなかったから、双短銃からスナイパー、更にはバズーカまで一通り作ってみたよ。

遠隔武器を作ってた、滑り止め要るかな…という事で追加で黒のグローブを作ってみた。

第一関節から指先までが無いタイプで、素材は皮なんだけど通気性は良くしてあるから、長時間付けていても蒸れない様になっている。

因みに、今回作った皆の服には武装解除無効化に加え、魔法や気の攻撃や衝撃を一定量緩和（軍艦が突っ込んで来てもかすり傷程度）させたり色々特殊加工してあるよ。

ポケットには亜空間に繋がってるから収納可能。

クロとエイトの武器はその中に入れておいた。

更に自己治癒力が格段に上がるから怪我なんて深手を負わない限りすぐに治る。

更に更に、自動洗浄・再生効果もつけたから、汚れたり破れてもいつの間にか綺麗になっているという便利っぷり！

正直、飽きなければ、これ一着で半永久的に他の服要らず！

…改造し過ぎた気がするけど。

「ま、いつか」と、私の分以外を箱に詰めて魔法球を出ると…

「姉様出来たのか!？」

「……………!」

目の前には無茶苦茶目を輝かせたエヴァとクロがいた。

素材を買った後、町の外に出て、認識障害を張り巡らせた空間に家を建てて、リビングで魔法球の中に入ったんだけど…どうやらこの二人、今まで待っていたっぽい。

その後ろの…二つの干からびた何かは見なかった事にしよう…。

「はい、こっちがエヴァでこっちがクロのだよ」

「ね、姉様、着てみてもいいか？」

「はいはい、多分サイズピッタリのはずだけど、合わなかったら言うて？」

「ああ!!」

「…クロも、着る」

「着せてあげようか？」

「……………」(コクリ)

エヴァとクロは仲良く別室に戻って行きました！。

さて、私も

「…レイ、どうして女子の買物はあるなに長いのですか」

「えっ、長かった？」

そうだったけ？

「あの後約8時間もうつろっていたらろう…」

そんなに経ってたんだー。

体に精神が引つ張られてるせいか、買物とかが妙に楽しくてしょうがない。

「まあ…それは良いとして、良いのが出来たか？」

「うん、かなり良いのが出来たよ。あ…これ」

箱を出して差し出すと二人はぽかーんとした。

…え、何で？

「こ、これ…もしかして僕達の方ですか？」

「そだよ？」

「……………」

「……………」

「…初めてプレゼントという物を買った」

「…同じく」

二人は受け取ると嬉しそうな表情で泣き出した。

プレゼント貰えなかったなんて…二人共、今まで可哀相な人生おく
つて来たんだね…。

よし、哀れみの視線を贈っておこ…!!?

「ずずつ…ありがとう…!!」

「…!?!」

ゼウスは感極まったのか突然、抱きついてきた。

ちょ、涙と鼻水汚い!?

…って、今日、(魔法球内は無しで)2回も抱きつかれてるんだよ
ね…。

ゼウスから、クロと同じくシャンプーのふんわりとした軟らかい良
い香りがしてきた。

…けどやっぱり泣いてるから塩分臭い。

臭いったら臭い。

「ゼウス…」

「ん？ ああ、悪い…」

言われて、冷静さを取り戻したのか、バツが悪そうに頭を掻きながら離れた。

普段はそんな態度を取らないゼウス。

見られて恥ずかしいのか…そっぽを向いた横顔がほんのり赤い。

「まあ、開けてみてよ」

私が気付かなかったフリをして開けるように勧めると、二人は恐々と箱のリボンを解く。

「……これはっ…！」

「おお…僕の好みに合ってます…！」

どうやら、二人ともお気に召した様で、口許が緩んでいた。

…っしゅっ…！

んー、やっぱり一生懸命作った物で喜んでもらえると嬉しいね…！

頑張ったかいがあるってもんよ！

その後、ワイワイとお喋りをしていた時に、部屋から出て来たエヴァとクロの姿を見て悶絶したのは言つまでもない…。

13・俺の、困惑（前書き）

今回はゼウス視点です。

なので、サブタイの雰囲気も少しだけ違います。

…意外に脳内冷静…w

実はゼウス君、どっちにも鈍感すぎて困惑気味です。

原因は長期引きこもり（笑）と精神が身体に引っ張られてるのが大きいと思います。

これからどうなるのかは私もわかりません！（ヨイ

これからも出来る限り更新していく予定ですので、よろしくお願ひ
します^^

それではごっご〜

13・俺の、困惑

《side:ゼウス》

思えば、“ネギま！”の世界に飛ばされて、既に400年近くが経った。

俺は此処に来るまで：“あの場所”から1歩も出なかったから、来た時は何もかもが新鮮だった。

初めは嬉しくなって旅行気分で見回っていたりしたが：ふと、俺は一人なんだと気が付いた。

かといって、俺は神だから、人間とは一緒にいられない存在だ。

もし、不老不死の存在が近くにいたら：人々は恐怖するだろうからな。

：という事で、俺は1人で暮らす事にした。

生憎知識だけは無駄にあるので、生きていく分には問題無い。

それに：神力で家を建てたり、金を荒稼ぎしたりしてズルをするのは、この世界の人間に申し訳ない：という事で人里離れた森の中でサバイバル生活をしていた。

釣竿を作るぐらいは良いだろう：という事で創造し、その辺にいた虫を適当にくっ付け、川に釣り糸を垂らす。

そのまま1時間程度鼻歌を歌いながら釣りをしながら川べりに寝そべっていた時だった。

遠くから人の気配がした。

しかも子供だ。

何かを探す様にキョロキョロして此方に視線を送り…がっかりした表情で去って行った。

俺はそのまま、気にせず魚を焼き始めたのだが…俺はそいつの事が何故か次第に気になり始めた。

まだ魚は焼けないし…探しに行くかと腰を上げた。

問題の子供は案外近くにいた。

近づくと気になった理由がわかった。

何故か神力を持っていた。

取り敢えず声をかけて引つ張る。

抗議の声が聞こえてきたが…知らん。

魚を差し出し、自分が神だと教えると、一瞬驚かれたが、「ふーん」と返された。

…驚いた事に深く聞き返してこない。

…助かるな。

いつかは話さなくていけないだろうが…今はあまり話したくないからな…。

そして、自分が男だと思っている様だったから、鏡を差し出すと、正直微妙な事で悩み出した。

…大丈夫か？ こいつ…。

何故そんな風に思っていたのかも含めて色々お互いに状況説明をしたら…俺の子供達が関わっていたらしい。

生きていたのか、と嬉しい反面、また何か企んでいるんだろうな…と思った。

そして、自己紹介が済んでいなかったのですと、彼女の前世での名前は光一らしい。

…顔に合っていないのでレイはどうだと進めてみた。

気に入ったらしく、如何やらレイと名乗るようだ。

それから、俺達は、2人で行動する事になった。

その途中で、クロに噛みつかれ、エヴァを助け、地面に刺さっていたエイトを助けた。

“あの場所”にいた時では想像もつかない体験をしている。

… 親密になってくれたのは俺の子供達ぐらいだったからな。

今では、笑ったり、落ち込んだり、泣いたり、怒ったり…と、忙しい。

… いや、元々無表情だった訳ではないんだが、少々感情に疎くてな…。

確かに疲れたりはするが… 世界維持の為にただ何となく生きていた時に比べ、充実している。

それも、総てお前と出会わなかったら、“楽しい”なんていう感情を知らなかっただろうな。

本当に、ありがとう…レイ。

…む。

俺らしくも無く、回想に浸ってしまった様だ。

… もしかして、思っている以上にプレゼントを渡されたのが効いたのかもしれない。

俺は、貰った物を壊さない様に、腕に抱え込むと「着替えてくる」

と言いつつ残して自室に戻った。

箱を開けた時、王冠しか見えなかったのだが、取り出してみると、服が一式揃っていた。

モデルはエンペラーの服らしい。

…エンペラーはマントを着ていないと思うのだが。

まあ、俺はマント好きだから全然良いんだけどな。

…俺の好みを熟知しているのか、細工に至るまで素晴らしい出来栄えだった。

初めて貰ったプレゼントが此処まで手の込んだ手作りだと…涙が誘われる。

俺は、また泣きながら着替えた。

服は、動きにくくも無く、丁度良かった。

王冠も忘れずに被る。

着ていた服は亜空間に入れ、部屋を出た。

エヴァとクロの着ていた服や俺の服のクオリティーはかなり高かったから、レイとエイトの服もきつと凄いに違いない。

早く見たいと、俺は上機嫌でリビングのドアを開けた。

如何やら俺よりも先にエイトは着替え終わったらしく、若草色のバ
ンダナと枯れ草色のコートを着ていた。

「エイト、中々さまになって…って如何した？」

俺は言いかけた途中で違和感を感じる。

エイトはある一点を見つめたまま硬直していた。

不思議に思いながらも、気になって視線をたどって行くと…

「あ、ゼウス。 サイズ合ってた？」

笑顔のレイがいた。

レイの服はエヴァと色違いのロリ服…ドレスで、とても良く似合っ
ていた。

普段、そんな服を着なかったから、とても新鮮で…お世辞抜きで可
愛かった。

「…この面子、クオリティー高すぎますよ…。 ロリコンとか関係
無しで悶絶しますって…」

エイトが硬直していたのは、見惚れていたかららしい。

エヴァやクロのロリ服や和服も可愛いとは思ったが、レイを見た時に何故かドキッとした。

思わず顔を背ける。

…真正面から見れない。

今まで感じた事の無い感情に、俺は困惑と疑問符で埋め尽くされた。

そして…普通に目撃してうるたえてるエイトに少しだけ、嫉妬した。

14・追いかけられました…。(前書き)

次話から前書きを書くのを止めて、活動報告の方に書くことにしました。

そちらには、解説、次回予告等書くつもりです。

良かったら、ちら見程度覗きに来てやって下さい^^

14・追いかけられました…。

《side:レイ》

あれから数日がたったある日…。

もう1度町に行こうってなったんだけど…

「待ってー俺のレイちゃんー!!」

「あんたのじゃないわよ、あたいのモンさー!!」

…如何してこうなった!?

道端を歩いていたらいきなり賞金稼ぎや魔法使いが一斉に追いかけてきた。

全員が全員、無茶苦茶笑顔を振りまきながら追いかけてくる。

1日目以外数日間は家に引きこもっていたからばれてなかったと思っただけど…。

という事は1日目のが広まったって事?

でも、1日目は1人も来なかったけど…。

謎だね…。

そして、もう一つ、不可解な点がある。

「レイちゃん、僕のプレゼントを貰ってくれないかー？」

「…何先越そうとしてるのですか。私の花束の方が良いに決まっています」

現実世界にいる時は、剣や杖を振りかざして来たりする人が多かったんだけど…何故かこの人達は綺麗に装飾されたプレゼントらしきモノを渡そうとしてくる。

アレだね、きっと中身が爆弾で怯んだ隙に捕まえようっていう魂胆なんだね！？

私は引つかからないよ。そんなものに！！

というか、花束要らんわー！！

「おい、【流星騎士】の後ろにいる4人の中に【闇の福音】がいるぞ！！」

「何だ、あのかわいい黒髪和服の女の子！？ 聞いてない！！」

「あら、【神帝】がいらっしやるわ！ かわいい！！」

「バンダナの子…将来期待できそうじゃん…今の内に」略

…更に人数増えた。

もう、パツと見…千人ぐらいだよ!?

そのまま小1時間走り続けたんだけど…追いかけてくる人々は一向に減らない。

いや、むしろ増え続けてるんだけど!?

というか、一般人も紛れ込んでるんだけど!?

「姉様…疲れてきたんだが…」

「そうだね…」

「僕も…」

「…クワ、疲れた」

「俺も…」

私達は疲れてきたというのに、後ろの方々は、目を爛々と輝かせながら猛スピードで追いかけてくる。

もはやゾンビの領域なんだけど!?

ナニソレコワイ!!

そのまま路地とかを適当に走っていると、道先のお店にいたおばさんが事情を察してくれたのか、店に入れと目配せしてきた。

よし、好意に甘えさせてもらおう!

そのまま店の中に転がり込むと、おばさんは店の看板を伏せ、扉に鍵をかけた。

「ここまですれば安心だよ。 はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

おばさんは苦笑しながら紅茶を注いでくれた。

「あなた達、アレだろ…【逆刃刀】なんじゃないかい？」

「えっ、知ってるの?」

「知ってるさ、この世界に知らないものなんていやしないよ」

「そこまでなんですか…貴方達何してるんですか」

「」「」「」……「」「」「」(汗)

エイトになま暖かい眼差しを送られたよ…。

そりゃあ、ゼウスとかゼウスとかゼウスの所為じゃない？

まあ、それは後でとっちめる事にして…

「おばさん」

「なんだい？」

「それを知ってて…何で助けてくれたの？」

おばさんに今一番気になる事を聞いてみると、腰に手を当てて豪快に笑った。

「この町はね…綺麗で活気のある町に見えるだろう？」

「まあ、そうですが…？」

エイトが話が変わった事に不思議そうに首をかしげている。

おばさんは、「まあまあ聞きなさい」とたしなめた。

「だがねえ、実は裏では達の悪いゴロツキどもがこの町を支配していて…治安が良さそうなのは表だけだったんだよ。」

そいつらはあたしから金を巻き上げたり、暴力を振るったり、とにかくやりたい放題でねえ。

ほとほとに困り果てたそんな時、あんた達がこの町に来たんだよ」

…ん？

話が全く読めないんだけど？

「私達が来てどうかしたのか？ … 買い物しただけなんだが」

確かに、エヴァの言うとおり、買い物しただけだよ…？

「それが大有りさ！

あんた達が来て次の日に世界中に【逆刃刀】がこの町にいるという噂が広まったのさ」

…は!？

「あんた達が目撃された日以来、一目でも本人を見たいというファンや観光客が押し寄せて、お祭り騒ぎになっているのさ。」

その中の賞金稼ぎの奴らあんた達に会いたくて、この町をウロウロ徘徊していた時に、たまたまその辺をほつき回っていたゴロツキどもが実は賞金首だって気づいたらしくてねえ。

あたしが、この町の裏事情について話したら「俺達の【逆刃刀】が穢れる!!」「同じ空気を吸わせてたまるか」とか怒りの表情で叫びながら店を飛び出していったのさ」

…え!?

「…つまり、あんた達が来てから物は観光客や賞金稼ぎ相手に飛ぶ様に売れるし、ゴロツキどもは残らず一掃されたみだから、あたしら町の人間にとっては万々歳なのさ」

「……………」（ポカーン）

…何でお買い物しただけでこーなるの…。

私達はあまりの規模の大きさに啞然としてしまった。

「…で、助けたついでに頼みがあるんだけどねえ…」

おばさんは、ニヤリと口角を上げながら手を口元に当てた。

…怖つ。

「あたしの旦那が町長やってるんだけど、この先の丘の使い道に困ってるんだよ。」

「良かったら、そこに住んでくれないかい？ 旦那には既に許可を貰ってあるから安心しな」

「おばさん…もしかして、それ目的で助けたんじゃないの…？」

「そうさね。でもあんた達にとっても悪い話じゃないんじゃないかい？」

確かに、町長公認で住める土地がタダで貰えるなら良いけど…。

「でも、賞金首に肩入れしてもいいの？」

「そんな事は些細な事さね」

…良いんかい。

「で、住むの住まないの、どっち？」

「ハイ、ヨロコソデ」

…おばさんの“有無を言わせぬ威圧感”に誰一人勝てなかった私達は、強制的に魔法世界での拠点が決まってしまった。

良かったのやら良くなかったのやら…。

15・カオスになりそうです。
(前書き)

修正しました。 恵美 笑み

… 恵美って、誰？？

15・カオスになりそうです。

《side:レイ》

さて、問題の丘に着きました！

おばさんに良い様にされた感はあるけれど、案外ワクワクしてただよね。

「…此処ですか？」

「そうさ、此処一帯あんた達に住んでもらおうと思ってねえ」

おばさんは全員の反応を満足そうに見ながら、口角を上げる。

…エイトが聞き返したくなる気持ち、分るよ…。

「…広すぎじゃね？」

「姉様、驚き過ぎて口調戻ってるぞ」

「あっ…ハイ」

そう、「驚き過ぎる」ぐらい紹介された場所は凄かった。

なだらかな丘で、芝生も整備されていて…ピクニックするには最適すぎるぐらい。

何より…面積が凄すぎる。

「サービスで裏の森全部も付けたから自由に使うと良いさ」

…え、更に広くなるの!?

「…コレって、面積どれぐらい…?」

「僕が見立てるに、丘が 450、000m²、森が1.5倍ぐらいで…簡単に言うと東京ドーム10個分と15個分って所でしょうか」

「ふーん、そうなんだ…って、えええええええ!?!」

広い…広すぎるよ…おばさん…。

物凄く裏がありそうで怖いよ、おばさん…。

「家とかまではあたしは出せないから、自分達で何とかするんだね。

…ほら、コレ契約書だよ、サインしておくれ」

私に渡された契約書。

…何か裏がありそうなので、エイトにパスする。

「……そういう事ですか、確かにこれは双方に利益があり、且つ、目立ったデメリットがないですね。」

敢えて上げるのなら、此方としては、多少行動しにくくなるぐらいですか」

「そうさね。 いやあ、あんたは分ってくれたかい…話が早くて助かるね」

そついうとおばさんは豪快に笑った。

エイトも心なしか口角が上がってる気がする…。

「エイト、つまりはどういう事だ？」

「…面白そうなので黙秘権使わせて貰います」

ゼウスが首を傾げながら聞くも、微笑しながらはぐらかすばかり。

「コチラが受けるデメリットは、一番嫌なモノでも多少の移動制限

がかかる程度です。

メリットの方は爆笑したくなる程大きいですが…どうします、契約しますか？」

エイトが言うのだから本当にメリットが大きいんだろうなあ。

頭の回転速いし。

それに、元の世界でも、若干意地悪で腹黒だったものの、嘘をつくような先生じゃなかったしね。

というか、どの道拒否権無じゃん。

ゼウスの方を向くと、彼もコチラを向いて頷いてきたし、クロとエヴァも頷いてくれた。

「…うん、サインしちゃって」

「わかりました」

おばさんと二人でクスクス笑いながらサインをし始めるエイト。

…こええ……………。

「気持ちはわからなくてもないが…姉様、口調戻ってるぞ」

「……ハイ」

「またもやダメだしを喰らう私でした、まるっ！！」

おばさんとエイトが爽やかな笑みでガツチリ握手をした後、「用事があるから後は宜しく」と手を振りながら去って行ったおばさん。

「…さて、土地買ったは良いけれど、どんな家を建てる？」

ただ今、例の丘でピクニックの様にシートを引いて、お菓子を皆で囲みながら会議中。

…うん、紅茶も良いけど、抹茶も美味しい。

見た目は幼児＋幼女な私達だけど、一応全員成人してるんだよね。

甘いモノも良いけど渋いのも良い。

もちろん、お酒も飲んだりするよ？

…って、話が…お話し閑話休題。

それにしても、どんな家にしようかなあ…。

建て直しか一応効くけど、面倒くさいんだよね。

「私的には、クリスタルパレスが良いんだけど、ゼウスはどう？」

「俺的には渋谷荘が良いな…あのボロアパート個人的に好きなんだよな…。」

レイ、今度にゃん丸のきぐるみ作ってくれないか？…って、それはどうでも良いな、エヴァはどうだ？」

「私か？ 私は…日本家屋が良いな…レイに教えて貰った竜安寺も良いな…。 エイトはどうなんだ？」

「僕はかりん塔が個人的には好きですね。 ついでに神殿もほしいですが…クロはどうなんです？」

「…クロは、レイの言ってたトローデン城が良い…エイトの故郷…」

「故郷じゃありませんって」（汗）

…皆さん、見事に全く違う建造物を希望してくれました…。

というか、ゼウス、あのアパートのボロさは凄まじいと思うよ？

きぐるみ…？ …今度作ってみようかな…？

エヴァは例の日本家屋に嵌っちゃったらしいんだよね。

でも、和は良いよね！

エイト：そんなに龍玉好きだったの…？

あんなに高くて行き来するのめんどくさい建物建ててどっつするの…
作れるけどさ。

クロは結構良いね。

あの城、結構見た目良いし、個人的には好きだよ。

エイトがああの服を着て城にいたら、完全にネタになるけどね。

というか、皆さん見事に系統が違うよね。

洋風のクリスタルパレスとトローデン城、和風…？の渋谷荘に竜安寺、更には良く分かんないカリン塔と神殿のセットメニュー。

カオスじゃん、これ…。

「…誰か譲る気無い？」

「無理だな」

「嫌だ」

「譲れません」

「……ない」

聞いてみると、全員に即答されたよ…。

まあ、私も譲れないけどね!!

もう、カオスでも何でも良いや。

建てたいモノ全部建てちゃえっ!!

…といつても、作るのは全部私なんだよね。

作るの楽しいし、皆喜んでくれるから別に良いんだけどね？

でも、また魔法球に引きこもり？

多くない？

…気にしたら終わりなんだねきつと!!

私は頭を振って考えるのを止め、魔法球を取り出した。

そして…背後から送られてくる期待した眼差し×4に気づかないフリをしながら、引きこもりライフに突入したのでした…。

16・何かいました…。 前編

《side:レイ》

やっと…

やっと完成したーっ!!!

皆の御要望通り完成したよ!!

製作期間約20日(魔法球外だと20分)で建造物五つ創ったよ!?

これって、凄くない!?

皆が待ってるだろうから、前にふざけて作ったスモークライトで縮小させて、亜空間に入れる。

162

「ただいまー!」

「姉様、おかえり」

「……おかえり」

「お、おかえり!」

「お疲れ様です」

出てきた瞬間、待つてましたとばかりに全員が振り返る。

目が早く出せと訴えてきている。

…こわっ!?

「皆さん…順番に出しますので落ち着いて下さい」

そういつて宥めて、やっと落ち着いてくれた。

…視線で死ぬかと思ったよ。

「取り出しやすい順番で良い？」

…亜空間、詰め込みすぎてヤバい事になってねー…」

「ああ」

「…喧嘩になりそうだからな。その方が良くかもしれん」

「同感ですね」

「……………」

「…じゃあ、まずはトローデン城だよ」

私は亜空間から城を引っ張りだし、ビッグ イトで照らす。

寸分の狂いも無く、原寸サイズで創ったよ。

「…凄い」

「…これはコレで…！」

皆は啞然としている…！

フフフツ…その反応が見たいが為に気合い込めたんだよ…！！

「中も再現したから入ってみよう？」

私が一階の謁見の間の扉に手をかけ、ゆっくりと押す。

キイイイイイ…

「ゼシカ、俺と踊ら…」

「嫌よ。それにしても彼は何処に行ったの？」

「確かに、兄貴は突然消えちまったでげす」

「そうですね。何処に行ってしまったのかしら…」

「まあまあ、ミート」

「……失礼しました」……（小声）

……パタン

…何か、聖堂騎士団一のナンパ男に、ツインテールお嬢様に、イガ帽子を被った元盗賊に、馬になる呪いを受けたお姫様に、小さな怪物がいた気がするんだけど…気のせいだよ？

そして、さりげなく足元にチーズ食べてる見た目はネズミ、素顔はおじさんがいたのも気のせいだよ…。

「き、気を取り直して、次行ってみよー!!」

「…だ、だな!!」

皆ぎこちない動きで、そそくさと城から離れる。

次は大丈夫でしょー。

あんな事が二度もあってたまるかって！

「次は渋谷荘だよ」

再度、亜空間を漁り、渋谷荘を出す。

見事な程ボロいアパートが出てきた。

これも力作だよ！

木の板にわざわざ腐食の魔法をかけて、後で強化もかけたから、ボロい癖に頑丈なんだから！

「おおっ…これが…！」

ゼウスの目が輝いている。

飛び込む様に玄関に駆け付けると、バンツと勢い良く戸を開け…

「君達、新しく住む人かい？」

いかにも！この私が渋谷荘の管理をしている会長だよ！ 大神君達に会いに来たのなら地下に…」

「…すみません、間違えましたー」

「え？ ちょ…」

ガラガラガラ……バタン

「…さあ、次行くか」

「…で、ですね」

…また詰まらぬモノを見てしまった…。

じゃなくて…!

「…どうなってるの、これ…」

「…姉様？ 驚かせようとしたんじゃないのか？」

「違うよ…私は建物しか創ってないよ」

そもそも、生物創った事無いからね？

どうやって作るのさ!?

「…アレが、どっかの意思が、ネタにする為になのか？」

「そこっ！ 電波拾わないっ!」

…でも、もしだよ？

そうだったら、残りの三つも…って事だよね？

…ソレってどんな嫌がらせ？？

…それに、私が創ったから、私にも責任が？

……。

「…レイ姉、大丈夫？」

「…ありがとう！」

クロ…！

君は私の癒しだよ…！！

私はクロに抱き着いて、顔を埋めた。

…じ、コレは汗なんだからねっ！！

「さて、次行ってみよー！！」

「「「「おー！」「」」」」

私が復活した後、話し合いをした。

続きをどうするかについてね？

エイトが「どうせなら何が出て来るか楽しんでみませんか？」「って言ったのに対し、「まー、それで良っか」となり、結局全部見る事になった。

「次は…竜安寺かな？」

亜空間からh(略)。

石庭付きの寺が出てきた。

「……………凄い」

エヴァの目が輝いてる。

無理も無いよね、日本マニアだもんね。

…いや、和風マニアかな？

「じ、じゃあ、早速入ってみるぞ？」

「お邪魔しまーす」

エヴァを先頭に、ぞろぞろとお邪魔する。

…今回は、「入ってすぐに御対面！」って事は無かった。

…でも、奥から話し声が聞こえてくる。

「…今回は誰だ？」

「先程の二つと私のは予想が簡単に付きますが…建設者ですかね？」

…正直、竜安寺は分からない。

建設者なら…あの人かなあ？

「んー流石かつちん。センスエエなあ」

「いやあ、そんな事ありませんよ。

それに、褒めても何も出ませんよ？あっきー」

「かつちんって、ホンマにケチやもんない」

「ハツハツハツ、そうじゃないとやってられませんよ…っ。って、お客さんが来た様ですね。」

何にも無い所ですが、茶と菓子ぐらいは出しますよ」

気配消してたのに気付かれてる!?

何で!?

ビビりながら襖を開けると、2人の男がいた。

狩衣を着た糸目男と着物を着たニコニコ顔の男。

2人共、爽やかーな笑顔を振りまいている…。

…チツ…イケメンがつ!!

「「「「「お、お邪魔しまーす」「」「」「」

「おお、行儀の良い子達やね」

「そうですねー、最近は礼儀の弁えていない人が多いですからねー」

…いや、私達子供じゃないし。

「ちょっと待っててーな？」

そういうと、狩衣を着た男が座布団を5枚引つ張ってきた。

「立ち話もアレだし、座るとええよ？」

…そう言われちゃったら、元日本人の私とエイトは断れない。
なので、皆で座らせてもらいました。

「はい、どうぞ。茶がたつまで、菓子でも」

「あ、ありがとうございます」

つつい敬語になっちゃうのはしょうがないよね？

好意に甘えて、菓子をひとつ摘んでみた。

…美味しい。

「上手いやろー。それもかつちんお手製なんよ？」

「だから、褒めても何も出ませんよー」

確かに美味しいは美味しいんだけど…

テンションについていけないせいで居心地が悪くて…プラマイゼロになってるのは…しょうがないよね？

「あははっ、そうですね（…早く帰りたい）」

「確かに、餡と生地の配分が絶妙で美味しいです（同感ですよ…）」

「この薄皮はどうすれば出来るんだ？（次行かないか、次）」

「この茶、渋くて中々…（次こそはまともなのが来ると良いな…）」

「……………（じくり）」

「ほう、そんなに知りたいん？ かつちん、教えたら？」

「そうですね…まず、菓子というものは…」

…かつちん（？）とあつきー（？）が熱弁をし始めたので、隙を見て逃げ出した私達でした。

17・何かいました…。 中編

《side:レイ》

前回「ちゃんと見回ってやらあ！」って決めたのに逃げたレイだよ…。

次行くのはもう目に見えて何が出てくるか分かってるから幾分か冷静さを保てるけどね…。

かりん塔だしね。

彼は必ずいると思うんだよね。

モフモフだよね…？

「とにかく登らないか？」

「そうだね、でもどうやって登る？」

空飛んだらダメって言われそうだし…」

「重力と引力を操作する方法ありませんか？」

「あるけど？」

「この塔って飛んだらダメなだけであって、走って登っちゃダメなんて原作では一言も言って無かったですよ？」

「だったら重力を操作して駆け上がったちゃえば良いかと」

「…えっ、ソレむっちゃ楽できるじゃん！」

「ロククライミングみたいなにのぼっても行ける事は行けるけど…疲れるしね。」

「そうと決まれば早速行こう！ レイ、頼むな」

「はいはい！」

全員に重力と引力操作魔法を振り撒き、私達は塔に足を付けた。

「トータル見たいな幾何学模様の柱の上には展望台がありました！」

「そして誰もいませぬ！」

「姉様、突然宙に向かって何言ってるんだ？」

「…何かここ最近エヴァがツッコミ役になってるのは気のせい??」

「気のせいじゃないかな？」

「このメンバー、ツッコミ係が少ないんだよ……」

し……しし知らんがな。

私はちゃんとツッコミ役やってるし。

「姉様はボケだ」

……え？

そんな訳……

「ああ、そうだな」

「そうですね」

「……」
「コクリ」

えええエエー……ッ！？

そうなの？

そうだったのー!？

…マジかつ!!

「姉様、口調」

「アイツ…」

エヴァが怖いよおお…。(泣)

「あのー、な？ そろそろ気づかないフリは止めてくれんかの…」

いやいや、振り返ったら私抱き着いちゃいそうなんだよね…。

自重する為にも…さ？

……。

ちょっとだけなら良いかな？

…チラリ

……!!

「も…もも…」

「も？」

「モフモフは正義ッ！！」

私は握り拳を作ってガッツポーズをした。

だって、だってさあ…目の前に白い大猫がいるんだよ！？

これは…これはっ……

「ハグしなきゃ損だぁー！！」 ガシィィイツ！！

もう自重できないからっ！！

「ぐうっ！？」

何か腕の中の白いモノが暴れてるけど関係ないっ！！

堪能しないと、モフモフをっ！！

無理矢理抱き寄せて動きを封じると、相手は諦めたのか溜息を吐いて抵抗を止めた。

…ヤバい、思ったよりも肌触りが気持ちいい…。

私が白いモフモフ…略して白モフにくっついてっていると、突然体が浮いた。

振り返ると獣化したクロが私の服の首元を口で加えてコチラを見下している…！

『猫ずるい。　クロのレイ姉、あげない』

口は私をぶら下げているので、使える様になったばかりの念話を広域に広げて威嚇しているクロ。

神獣になったせいか前足から頭までが4mを超えていそうなくらい高いけれど、今にも泣きそうな目のせいで重圧感が全て打ち消されちゃってるクロ。

えっ、何この可愛い妹。

「う…ごめんねクロ！…！」

そのまま身を捻ってクロにだk（略）。

「…落ち着いたかの。」

「取り敢えずクロとやら、人型に戻らんか。天井に擦つとるぞ。」

私の抱き着き症候群が収まった後、白モフ…もとい、カリン様は深々と溜息を吐いた。

…いや、そんなに大袈裟にしなくても。

「んーと、何から説明すれば良いんかのー」

杖をつきながらアツチへウロウロコツチへウロウロ。

「……………忘れたわい」

ドテッ
x 5

わすれたんかい!!!

駄目じゃん!

「…まあ、上にいる奴らが教えてくれるじゃろっ」

カリン様の謎の威圧に脅えた私達は飛行魔法を駆使しながら神殿に向かうのでした…。

…アレ？

私達の方が年上じゃなかったっけ？

本日場面切り替え4回目だよ！

そしてやっと着いたよ神殿に！

……遠くね？

「誰がいるんですかね？」

「さあ…でも、出来たら主人公くんに会いたいな」

「だな」

そんな会話をしながらフワリと降り立つ。

うわ、本当に真っ白な床だ！。

しかも傷一つ無いし…どんな手入れしてんのかな？

多分ポポが掃除してるんだろうな！。

凄いなー。

「あ、おめえらが例の奴か？」

うおっ！？

突然目の前に気配を感じたよ。

凄い、気付かなかったし…。

「おーい、来たぞー！！！」

目の前の私達と同じ年ぐらいの少年…黒髪ツンツン君は後方の神殿に向かって叫ぶ。

するとゾロゾロと中から人がでてくる。

緑のターバンさんを筆頭に、野菜王子に紫髪のイケメソ（笑）、最後に黒髪セミロングな女の子が出てきた所でやっと途切れた。

……。

えーっと、これ、いつの時代…

「…もしかして、GTの？」

「え、GT？」

そんなんあるの？

Zまでじゃないの？

「はい、GTはこの続編で悟空が子供になってしまっ所からスタートします」コソコソ

「そんなのあつたんだー」 ヒソヒソ

「原作者の鳥 氏は“終わり”という意味でアルファベット最後の“Z”を付けたらしいですが、アニメの制作スタッフの方は終わらせるつもりは無かったらしく…“GT”の意味は“ごめんよ 山”の略ではないかと言つのが専らの噂です」 コソコソ

「何それ酷い」

『…何ヒソヒソしてるんだ？』

後…ピッコロに聞こえてると思つぞ『

「くはっ…!?」

た…確かに…！

悟空がフリーザ戦から帰ってき時とか地獄耳でコソコソ話を盗み聞きしてたね？

忘れてたよ…！

「と、取り敢えず自己紹介しよっか」

「で、ですね」

そ、そうだね、戻そっか。

…なんかピッコロさんの顔色が微妙に悪い気がしないでも無いけどね！

「私はレイ。一応神様見習いだよ」

ネギまの世界を放浪してるだけなんだけどねー。

「俺はゼウスだ。最高神でもある」

「…レイ姉の神獣のクロ」

「吸血鬼の真祖のエヴァンジェリンだ。

エヴァと呼んでくれ」

「僕はエイトです。

元人間だったはずなのにどっかの誰がさんに神改造されたせいで人間の枠を越えちゃってます」

…おおう。

恨み籠ってるねー。

「んじゃ、そちらさんどうぞー」

「ん？ オラからすれば良いのか？

オッス！オラ悟空！！」

「…ふん、俺はベジータだ」

「父さん！…ごめんね、俺の父さんいつもこんなだから…」。

俺はトランクス、よろしく」

「…ピッコロだ」

「私はパンよ、よろしくね！」

『あ、パンは悟飯の娘で悟空の孫に当たる子です』

なるほどー。

一人分らない子がいたんだけどパンっていうんだね。

…無茶苦茶可愛いじゃん。

「……………ダメ」

「ぐふっ!?!」

クロの上目遣い 攻撃!

レイは 9999 のダメージを受けた!!

ああ…パト ッシュ…眠いよ…。

「…ちぬ」

「姉様…アホか、アホなのか」

「ん、今更気付いたのか?」

「…エヴァとエイト酷い」

み、みんな私を何だと思っているのさー!?

「アホでポケ役な姉様?」

「天然イジられ部下か…?」

「TSされた年上の元生徒ですかね?」

「…私のレイ姉」

な…ななな…!?

酷い、ひど過ぎる…。

というかクロ、ズレてない?

何か寒気もしてくるんですけど…。

「そんな事は、どうでも良いんだが…」

えっ!?

全然良くないやい!!

…ま、良いや。

「で？ ゼウス、何が気になるの？」

「いや、大した事ではないが、そういえばこの面子に生粋の人間…
いや、地球人が居ないと思ったただけだ」

「……………」

ゼウス 最高神

レイ（私） 人間 見習神

エヴァ 人間 吸血鬼の真祖

クロ 魔獣 神獣

エイト 人間 神改造された最早人間の枠を超えた謎生物（笑）

「僕の説明酷くないですか…？」

……………。（無視）

悟空 サイヤ人

ベジータ サイヤ人

トランクス ハーフ

パン クォーター

ピッコロ ナメク…もといナメツク星人

「……………」ピクピク

……………。(無視)

…………えっ、ほんとだ…いない。

18・何かいました…。 後編

《side:レイ》

今日は大嵐ですが、午後からは大分風が止むでしょう。

しかし、空は雲に埋め尽くされ、曇天が続くでしょう。

以上、かりん塔上空、神殿から皆のあいどる レイちゃんがお送り
しました。

… 天気で表すならそんな空気が漂っている、この場所。

む…むむ…気まずい…

『…それ、姉様のせいなんだが』

『そつだそつだ!』

『ゼウス、貴方何言ってるんですか。 振った貴方も悪いでしょう』

『……レイ姉だけが悪い訳じゃない』

『ほら、全員に向かって謝りなさい』

「「「「めんなさい」」」」

…何やってるんだろ。

開幕早々謝罪なんて…（メタ発言）

正直言つて、何で謝ってるか分からないけど、それを言つと永遠と説教せれそうだから黙っておく。

言わない方が吉だよね！

…取り敢えず（誰に対してか全く分からないけど）謝ってエヴァ達に許しを貰った私とゼウスは魔法で出したマットの上に座り込む。

他の人も続いて座り、丁度円状に向かい合った。

「さて、どんな修行をするのか何だけd「ちょっと待ったー!!」

…えっ?」

トランクスの発言に思わずツツコミを入れてしまった私。

いや、おかしくないよね? 何で修行前提で話が進んでいるの!?

「それってどういう事?」

「え? その為に俺達呼ばれて来たんだけど…?」

トランクも私と話が噛み合わない事に怪訝そうに眉を寄せている。ちよつと整理してみよう…私は皆にこの土地に何を建てたい？って聞いて、それぞれの希望通りのモノを作って亜空間から持ってきた。その際、誰かに来て下さいと交渉した訳でも拉致つて来た訳でもないのは宣言できるんだけど…何でこうなった？

「俺達は、界王神様の神友達の三人組に『俺達の友達の修行に付き合つてやってほしい』って言われて来たんだけど…」

…えつ。

「『特にバンダナの人、経験不足みたいだからメツタメタにお願いします。サイヤ人だから死に掛ける程強くなりますから』とも言つていたわ」

「う…ぶっ！？」

…ええつ。

「『』というか、全員好きな様に戦つて良いから。君達も楽しんで来ると良いよ』とも言つていたな」

…ええええつ。

「という訳だ！ オラわくわくしてきたぞ！」

ご、悟空さん、貴方…き、金髪う…！？

そしてこっちをキラキラとした目で見ないで…！？

「修行を付けると言われて弱いかと思っただが…そのバンダナ以外は中々勝負になりそうだ。」

修行ついでに出来るのも良いが…異世界の技にも興味がある」

「奇遇だな。私も異世界の技には興味があつてだな…。」

お前が姉様の昔の話に出てきた人物の一人か、私が相手になつてやるっ」

あるえ…ピッコロさん…？

神様と融合して、多少は穏やかになつたんじゃないの…？

そしてエヴァ！？ 何言ってるの！？

「…フン、俺はそのマント野郎と勝負したい」

「…貴様ごときが最高神の俺と戦争がしたいのか？ベジータ。」

初めから死ぬ気で掛かって来ないと、痛い目見るところか気づかない間に消し飛ばさぞ？」

ベ…ベジータさん！？

つて、ゼウスも何挑発してるの！！？

何様俺様ゼウス（ベジータ）様な二人が暴走したらいろんな意味で世界壊滅するよ！？

私達酸素不足で死ぬんだよ、死んじゃうんだよ！？

まあ…最悪地球に逃げれば良いんだけど…つて、それじゃあ魔法世界の人が捨てる形になるから無理！

「正直俺は機械いじってる方が好きなんだけど…折角こっちに来たんだし、ピッコロさんと同意見かな？」

メンバーチェンジするかもしれないし、早めに戦っておいて損はないだろうから」

「…クロ、相手する」

…え、するの！？

しかも、ストッパー役のトランクス…どころかクロまでもやる気モード…？

ど、どどど、どつしよう！？

っ！そうだ！ こんな時のエイトとパンちゃ…

「まずは私が教えるね？ まず気を感じる事から始めましょ」

「ですね…ん？ この違和感が…気ですか？」

「そうそう！ で、掌に集める感じで…」

既に周りを止めるのを諦めて何故か和気藹々とした和やかムードで会話している二人。

…誰も止める人がいないよ…。

一人でどうしようか考えてたら、いつの間にか皆さんは武空術やら魔法やらでそれぞれ思い思いの場所に飛び立ったご様子。

広いからねー東京ドーム25個分は。

「レイだったっけ？ オラたちも始めっぞ」

「え、ちよっとまっ

」

何処かの修行の間を連想させる白い空、何処も彼処も黒で塗り潰されている不気味な城、葉も茎も花も全てが金の濃淡で出来ている何処かの森を連想させる黄金の花が咲き乱れる庭園。

この異様過ぎる空間を作った人は…相当センスが悪いだろうというのは用意に想像がついた。

そんなとある一角、庭園に囲まれたテーブルからくしゃみが響いた。

「…っ、誰か噂したのかな？」

始めに口を開いた白色は苦笑いをしながら反動で屈めた身を起こす。

「そうだと思いますよ？ 私達は良い意味でも悪い意味でも有名だったりしますから」

くしゃみをした事が恥ずかしいのか、ハンカチで目から下を覆っている金色。

どこまで金色が好きなのか分からないが、持っているハンカチまでもが金色である。

「……相違無い」

一番酷いくしゃみをして椅子から転げ落ちた黒色が、テーブルの角を掴みながら身を起こし、何事も無かったかの様に紅茶を啜りだした。

その間ずっと無表情であり、第三者が目撃していたら、気味悪がるか苦笑のどちらかであろう。

「父さん辺りかな？」

「いえ、他の神なのでは？」

「……違うと思うが」

「じゃあ、兄さんは誰からだと思うの？」

白色はニヤニヤしながらテーブルに手をつけて黒色に迫る。

黒色はそれを知りながら紅茶をマイペースに啜り…

「……前に人間界に行っただろうか？」

「うん…此処に来る前の事だから600年ぐらい前だよな？」

「…その時の事覚えているか？」

「確か、その辺をぶーらぶらしてたら、偶然死に掛けた狼がいたんだよね」

「……一応彼は人なのだが」

「ですね。で、私が気まぐれで彼を転生させました」

「…それじゃない、その前だ」

黒色は頭を微かに横に振り、否定する。

それを見た白色と金色は訝しげな表情を見せた。

黒色はティーカップをテーブルに置いて…一言。

「…あの湖にいた魚を食べたから、呪われたかもしれない」

「えええええっ!?!」

「…ほっ!?!」

黒色の余りにも的外れな言葉に白色は笑顔のままテーブルとティーカップごと地面に倒れ込み、金色は飲んでいた紅茶で咽た。

「いやいやいや、それは無いでしょ! 幾らなんでも今更過ぎるし

!」

「…ほっ!?!」

紅茶で白い服を汚しながら起き上がった白色は口元を引きつらせながら起き上がる。

約一名喋れてないが、涙目で頷いている所からして白色に同意らしい。

そんな様子を見て「戯言だ」と言った黒色の表情は相変わらず無表情だが、瞳が微かに揺らいでいた。

「…はあ、兄さんの冗談は怖いよ」

白色は溜息を吐きながら頭を抑えた。

偏頭痛かもしれない。

「…………それはおいといて、だ。」

…俺は俺達を送った奴等が原因だと思っただが。

…あの度が過ぎた嫌がらせのせいで彼らに呪詛でも吐かれたのだろっつ

「えーそれが原因な訳…っ！！」

「…やっぱりそうか」

否定しかけた白色に突然悪寒が走る。

それを見た黒色は納得し腕を組んだ。

そんな二人（主に白色）を呆れた眼差しで見ながら金色は水晶の様な大きな球状のモノを何処からともなく取り出す。

…正直金色にも今回の非はあるのだが、棚ボタ状態で本人は気づいていない。

「何してるんだい？」

金色の行動に気がついた白色は不思議そうに声をかける。

金色は地面に置くと白色の質問に答える為、口を開いた。

「どうせ暇でしょう？ だったら彼らの様子でも観察しようと思いまして」

「うん、それは良いね！ 此処にいと娯楽なんて無くって退屈で退屈でしょうがないからね」

「…だからと言って無断で眺めるのはどうかと思うが」

黒色は止めようとしているが、言ってる割には身を乗り出して水晶

を眺めている。

金色はその様子を見てクスリと笑うと水晶に手を翳した。

19・戦闘になりました！　《レイvs悟空》編

《side:レイ》

怖い、怖すぎるよ…。

慌てて屈みこんだのは正解だった。

さっきの【かめはめ波】…雲全部蒸発させたよ…？

お陰で下界が見えるよ…？

駄目だ、失笑通り過ぎて笑うしかないよ…。

…まあ、私も出来るけどさ。

「ひゃー、おめえ今の避けれるんか！

気い使わずに【十倍かめはめ波】避けた奴、オラ始めてみっぞ」

目の前の金髪さんは気を纏わせながら立っている。

私が避けたのを見て心底驚いているのか目を見開いていた。

…ってか何が「ひゃー」だよ！？

避けなかったら死んでるわボケ！！！！

髪の毛4本焦げてチリチリになったし！

アホ毛返せーっ（泣）

というか、このまま行くと世界が崩れるから絶対に！

「ねえ悟空、場所変えよう？此処じゃお互いに本気出せないだろうし…ね？」

「他に良いところあんのか？」

「うん」

たららたったらら

ダイオラマ魔法球・戦闘演習バージョン！

ふふふ…な・ん・と！ゼウスがどれだけ暴れても壊れない様に神力で神改造してあるのだー！！

これさえあれば、地球が壊滅する様な威力の技を使っても壊れないどころか傷1つ付かないというゼウス印のお墨付き！

更に異様な位中が広いわ、エリア分別がしてあるわ、時間指定幅がとんでも無い事になってるわで長年コレ使って修行している私でも機能が把握し切れていないとです。

というか、製作者のZさんでさえ何追加したか忘れたご様子。

…覚えとけよ!!

「…すげえな、それ！ ゼウスって奴、ブルマより頭良いのか？」

いいえ、頭は残念です。

というか、ブルマさんと比較しちゃ駄目だと思う。

彼女はまだまだ生きてる年数が1000年切ってるのにあそこまで作つたのは…すごいと思うよ!?

ゼウスが出来るのは神力最大限に使ったゴリ押しと、無駄に長生きしてる知恵の無駄遣いだし!

もし、ゼウスがブルマさんと同じ年だったら負けるね、絶対に。

って、そんな事考えてる場合じゃなかった!

「取り敢えず入ろっか!」

頭を切り替える為にぶんぶん振った後、私達は魔法球内に入った。

…

…

……

着いた先の城前から武空術とかを行使して荒野が広がる場所に着いた。

…うん、此処なら良いっしょ。

「この辺にしよう」

「っし！」

気合を入れたのか構えた悟空は先程までの空気を引き締め、良い感じの緊張感を持って此方の行動を警戒している。

私もラフに構えていつでも反応出来る様にした。

一時の間。

「…はっ！！」

先に動いたのは私。

地を蹴り、1歩で距離を詰めた私は瞬時に咸化法で身体強化をして、取り敢えず右ストレートを叩き込む。

悟空は口元を引き攣らせながら右に身体を傾け避けた。

そこを左足でハイキックを繰り出す。

それもひらりと躲されたけど、そんな事は想定内。

…というか当たる訳がないと思ってるんだけどね？

「うりゃああああー！！！」

とにかく意味不明な雄叫び（笑）を上げながらラツシユラツシユ！！

と言っても適当にやってる訳じゃなく、ちゃんと当たる（と思われる）瞬間に魔力と気を使ってダメージ増量させてるんだよ？

全部躲わされてるんだけどね…。

むう、もっと身体強化した方が良いのか。

というか、何で悟空ってば結構必死そうな顔してるん？

そんな事考えてたら悟空は地を蹴り、後退した。

「…ひ、ひえゝ怖ええ…当たってたらふっ飛ばされてっぞ」

「えええっゝ！？そんな事無いってば！ 悟空なら平気な癖にゝ」

「…受け止めたら骨何本か骨折しちまうって」

なるほど〜だから全部避けてたんだねー！

って、謙遜しすぎだって！

一応一発一発に惑星破壊する威力を込めてるけど、『や、やはりそうか！貴様勝手に人の妻を！自分の妻のをやりやーいいだろ！チの乳の写真を！』とテンパってキャラ崩壊シャウトした人も『戦闘力は53万後変身は3段階残っている』と自慢げに話していた人も惑星破壊できるんだからそこまで強くないと思うよ？

それに『や、やはりそ（以下略』の人は魅惑の頭のナツさんと2人で仲良く地球に来た時『地球もろとも宇宙のチリになれー！っ！…！』って叫んでるから、その時点で破壊出来ただろうし。

そこまで強くない筈だよ…ね？

「じゃあ、今度はオラから行くぞ」

っは！！、思わず思考の海に沈んでいたらしい。

悟空はそういつとすぐさま瞬間移動みたく接近してくる。

高速で叩き出される体術を避けたり腕で軌道をずらしたりしてはいけるけれど…一撃一撃がズッシリと重い。

…冗談抜きで私のパンチより怖いってば!!

冷や汗が頬を伝っていく。

パンチも確かに怖いけど、足蹴りも怖い。

と言つか、何が当たっても死ねる気がするんだけど!?

躲しながら反撃を試みるも隙と言う隙が無いから手出しようが無いし…どうすれば!?

…あ!!

魔法があつたじゃんか!!!

自分の馬鹿ああ!!

即座に【最強防護】クラティステー・アイギスを展開する。

これは強力な対物・対魔法障壁を多重・広範囲に展開する、アラルブラ赤き翼の某師匠が使っていた魔法。

でも、これを周囲に張り巡らせとけば攻撃なんて通らない最強な魔法の一つだったり。

今回は私の周りにのみ展開しているから、維持コストは低い。

詠唱してないから本来よりも強度下がっちゃってるんだけどね?

…まあ、大丈夫ですよ。

案の定、ゴンツ！という音と共に攻撃を防いでくれた【最強防護】
クワティスター・アイギス
君。

だけど、悟空の放ったパンチによって歪んでる…？

そして…ミシミシと軋んでる…？

嫌な予感がして瞬間移動をして即座に離れる。

そして…はいいゝ悟空さんの手が【最強防護】
クワティスター・アイギス
を突き破りましたー！

「かてえかてえ！手え駄目になるかと思っただぞ」

悟空さんは殴った手を痛そうにもう片方の手で摩っています。

わーすごいすごい！…って

「何ですとー！ー！ー！ー！？？？？」

何で突き破れるんツ！？

…落ち着け、落ち着くんだ私…！！

自分にそう言い聞かせると、なんとか落ち着けた。

…んまあ、あの悟空だし、破られてもおかしくないよねー。

【最強防護】は最強であって無敵じゃないからねー。
クラテイスデー・アイギス

すつと構えると悟空も構えた。

律儀に待っていてくれたらしい。

悟空は戦う事が楽しいのか嬉しそうにしている。

「そんなに楽しいの？むっちゃニヤけてるよ？」

「ああ、おめえもな」

…え？

思わず口元に手を当てると…口が孤を描いていた。

自覚無しでこの戦いを楽しんでいたらしい。

「バトルジャンキー
戦闘狂になつたつもりは無いんだけどなー」

まあ、いつか。

とにかく…

「再開するよっ！！」

「おっっ！」

お互いに頷きあつて、更に距離を取る。

「デイル・ディア・ディレスト・ブローディア」

「かー」

今度は技で…！と思つて呪文を紡ぐと、悟空も分かつたのか、お得意の必殺技を繰り出そうと構える。

ト・シュンボライオディアールコネットホ・モネラネ・フロゴス

「契約に従い我に従え炎の霸王」

「めー」

体内の魔力が動いているのが分かる。

悟空の手の中には青白く光る球体が出現した。

エビゲネーテカ田ケス・カタルセオイヤギネー・ロンファイア

「来れ、浄化の炎、燃え盛る大剣」

「はー」

大気の魔力が集まり始め、私の魔力と混ざる。

気の塊は輝きを増し…手から溢れんばかりに煌く。

「ほとばしれよソドムを焼きし、火と硫黄、罪ありし者を死の塵に」
レウサウトーン ビューム・カイ・テイオン ハ・エペフレゴン、ソドヌマルトトウス エイス・クイン・タナトゥ

…」
「めー…」

私の魔力と大気の魔力を最大限にまで込めて唱えた魔法。

こんなに魔力込めた事なんて今まで一度も無い。

私の魔力は膨大で質が高いし、完全詠唱、更には広範囲焚焼殲滅魔法なのに無理矢理範囲を一箇所に集中させた…ある意味オリジナル魔法化してるアレンジ魔法だよ。

いくら悟空でもただじゃ済まない位の威力はあると思う。

逆に悟空のも、始めに打った【かめはめ波】なんて比にならない程気を込めているのが分かる。

私も当たったら…ヤバイ。

でも…避ける気は……ない！

「【燃える天空】ッ！！！！」
ウイラニア・フロゴシス

「はああああっ！！！！」

二つの気と魔法が、ぶつかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1684v/>

俺様な神様と普通の俺の異世界旅行記 in ネギま?

2011年12月11日22時49分発行